平成17年度

学生ボランティア活動の支援事業に関する報告書

学生ボランティア活動支援・促進のための連絡協議の集い
体験ボランティア・学生ボランティア活動セミナー

平成18年3月

独立行政法人
日本学生支援機構
JASSO Japan Student Services Organization
目次

はじめに

I 平成17年度「学生ボランティア活動支援・促進のための連絡協議の集い」実施報告

<table>
<thead>
<tr>
<th>章節</th>
<th>页数</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>開催概要</td>
<td>7</td>
</tr>
<tr>
<td>プログラム</td>
<td>8</td>
</tr>
<tr>
<td>開会・挨拶</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>第1部 全体会</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>講演</td>
<td>「ボランティア活動の推進による地域教育力の再生」 13</td>
</tr>
<tr>
<td>シンポジウム</td>
<td>「大学になぜボランティアセンター機能が必要なのか」 19</td>
</tr>
<tr>
<td>第2部 分科会</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>第1分科会</td>
<td>「学生部職員のためのボランティア入門」 41</td>
</tr>
<tr>
<td>第2分科会</td>
<td>「ボランティアセンターのつくりかた」 43</td>
</tr>
<tr>
<td>第3分科会</td>
<td>「実践的ボランティアコーディネーション術」 45</td>
</tr>
<tr>
<td>第4分科会</td>
<td>「大学の授業におけるボランティア支援の可能性」 47</td>
</tr>
<tr>
<td>第5分科会</td>
<td>「学生が結ぶボランティアネットワーキング」 51</td>
</tr>
</tbody>
</table>

参加者アンケート

- 集計結果「総括表」 53
- 集計結果「詳細」 57
- アンケート様式 69

参加者内訳 71

参加大学・機関等一覧 72

II 平成17年度「体験ボランティア・学生ボランティア活動セミナー」実施報告

<table>
<thead>
<tr>
<th>章節</th>
<th>页数</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>事業計画</td>
<td>75</td>
</tr>
<tr>
<td>体験ボランティア・学生ボランティア活動セミナー実施一覧</td>
<td>76</td>
</tr>
<tr>
<td>各支部の実施報告・参加者アンケート</td>
<td>77</td>
</tr>
<tr>
<td>札幌支部</td>
<td>79</td>
</tr>
<tr>
<td>仙台支部</td>
<td>93</td>
</tr>
<tr>
<td>東京支部</td>
<td>105</td>
</tr>
<tr>
<td>金沢支部</td>
<td>125</td>
</tr>
<tr>
<td>名古屋支部</td>
<td>133</td>
</tr>
<tr>
<td>京都支部</td>
<td>157</td>
</tr>
<tr>
<td>大阪・神戸支部</td>
<td>173</td>
</tr>
<tr>
<td>広島支部</td>
<td>185</td>
</tr>
<tr>
<td>松山支部</td>
<td>209</td>
</tr>
<tr>
<td>福岡支部</td>
<td>237</td>
</tr>
<tr>
<td>大分支部</td>
<td>247</td>
</tr>
<tr>
<td>※「参考」大阪支部（平成16年度実施分） 271</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

参加者アンケート 281

- 実施全支部の集計結果「総括表」 287
- アンケート様式 295
はじめに

独立行政法人日本学生支援機構は、平成16年4月、奨学金貸与事業、留学生支援事業、学生生活支援を通じて、次代の社会を担う豊かな人間性を備えた創造的な優れた人材を育成するとともに、国際理解・交流の推進を図ることを目的として発足いたしました。

創設2年目を迎え、大学等の学生支援業務をリード・サポートする中核機関として、社会のグローバル化や多様化にきめ細かく対応し、日本人学生と外国人留学生の双方に対する総合的な支援事業を実施しております。

学生ボランティア活動については、平成7年の阪神・淡路大震災を契機として社会の注目を集め、各大学等においても、正課教育への取組みや学生ボランティアセンターの設置など、様々な支援を行っています。

また、平成14年7月には、中央教育審議会から「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」の答申があり、今日の青少年をめぐる様々な問題を解く糸口として「奉仕活動・体験活動」を奨励・支援することの重要性が説かれ、大学等を含め、社会全体で活動を推進していくための仕組みや社会的機運の醸成の必要性が提言されています。

こうした状況の中にある、日本学生支援機構は、平成17年度も、学生ボランティア活動支援事業の一環として、全国の大学等の学生ボランティア活動支援担当教職員、ボランティア関係機関、団体担当者及び学生の参加による「学生ボランティア活動支援・促進のための連絡協議の集い」を実施し、また、日本学生支援機構の全国各支部において、各地域の大学等及び関係団体と連携を図り、「体験ボランティア・学生ボランティア活動セミナー」を実施いたしました。

本報告書が、大学等及び地域社会における学生ボランティア活動を支援・促進するための参考資料となれば幸いに存じます。

末筆ながら、本事業を実施するにあたって、ご多忙の折にもかかわらず様々な形でご協力をいただきました関係者各位に対し、心からお礼を申し上げます。

平成18年3月

独立行政法人 日本学生支援機構
平成17年度
学生ボランティア活動支援・促進のための連絡協議集い

実施報告
開催概要

◆ 趣 旨
今、大学等において、学生が行うボランティア活動等を積極的に奨励するため、正規の教育活動として、学内外における社会体験・地域活動を視野に入った取組みが社会的にも注目されています。中央教育審議会答申「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」の中でも、大学等における奉仕活動等の奨励・支援についても重要視されており、地域等において大学生のもつ潜在的な力に対する期待感は日増しに高まっています。
また、さまざまな場において、大学等とボランティア関係団体との情報交換や緊密な連携・協力が強く望まれています。
このような状況を踏まえ、大学と関係機関・団体の担当者間の連携・協力をさらに推進するために、それぞれの具体的な取組み事例や課題等についての情報や意見交換等を行います。

◆ 主 催
独立行政法人 日本学生支援機構

◆ 講 演
文部科学省

◆ 日 時
平成17年12月8日（木） 10:30～17:30

◆ 会 場
東京国際交流館 プラザ平成（お台場）
東京都江東区青海2-79 TEL：03-5520-6001

◆ 対 象
全国の大学・短期大学及び高等専門学校のボランティア活動支援業務担当教職員、ボランティア関係機関、団体担当者及び学生

◆ 企画実行委員会委員
興 楓 宽 社会福祉法人世田谷ボランティア協会 理事長
栗 田 充 治 亜細亜大学国際関係学部 教授
平 野 吉 直 信州大学教育学部 教授
小 拔 隆 東北福祉大学ボランティアセンター コーディネーター
プログラム

◆ 開 会 10:30

☆挨拶 独立行政法人日本学生支援機構 理事 大浦道徳
☆オリエンテーション

◆第1部 全体会 10:40

☆講演 「ボランティア活動の推進による地域教育力の再生」
山本昌博 文部科学省生涯学習政策局社会教育課ボランティア活動推進専門官

☆シンポジウム 11:00〜12:30
「大学なぜボランティアセンター機能が必要なのか」

全国の大学において、いままざまな学生のボランティア活動支援への取り組みが行われています。ボランティアセンターというかたちに拘らず、それぞれの大学の特色を生かして、学生・教職員のさまざまな取り組みをサポートするための持続可能なコーディネーションシステムをどう築いていけばいいのかについて、実践例をふまえながら探ります。

総合司会：興梠寛 社会福祉法人世田谷ボランティア協会 理事長
シンポジスト：田中芳則 広島大学障害学生支援のためのボランティア活動室 助教授
山本和 国際基督教大学 総務理事
和栗百恵 中央大学総合政策学部 特任講師

◆情報交換会（ランチセッション） 12:30〜14:00

◆第2部 分科会 14:00〜17:30

第1分科会 「学生部職員のためのボランティア入門」
コーディネーター 興梠寛 社会福祉法人世田谷ボランティア協会 理事長

ボランティア活動は、学生が活動をとおして、自己や社会、そしてより深い学びと出会いのための限りない教育力を秘めています。また、大学とコミュニティを「必要としあう」双方向の関係に結び社会に活力をもたらします。「入門編」分科会をとおして、大学はなぜボランティアに取り組むのかについて探ります。
第2分科会 「ボランティアセンターのつくりかた」
コーディネーター 小抜 隆 東北福祉大学ボランティアセンター コーディネーター

学生の社会参加と学びを探るために、ボランティアセンターはどのような機能・役割を持ち、どんな運営をすればよいのでしょうか。「これから設置する」、「いまま運営している」など皆さんと一緒に意見・情報交換をとおして魅力的なボランティアセンターづくりについて考えます。

第3分科会 「実践的ボランティアコーディネーション術」
コーディネーター 村田素子 聖心女子大学 学生部マグダレナ・ソフィアセンター

ボランティアコーディネーターとは？コーディネーションって？大学でのボランティア推進を担う皆さんも戸惑うことも多いでしょう。大学生の特性を知った上での主体性を引き出すプログラムづくりについて、実践事例を交えて意見交換しながら考えていきます。

第4分科会 「大学の授業におけるボランティア支援の可能性」
コーディネーター 栗田充治 亜細亜大学国際関係学部 教授

ボランティア活動をはじめ、大学の地域連携・社会貢献の取り組みが盛んになっていますが、大学におけるボランティア推進は教育と切り離せません。ボランティア関連科目の運営事例や、一般授業の中でボランティアに結びつくる体験学習の試み等を取り上げ、大学の教育活動の新しい展開の方向を探ります。

第5分科会 「学生が結ぶボランティアネットワーキング」
コーディネーター 今井治 SVnet 事務局コーディネーター

学生による、学生のための分科会です。ボランティア活動を進める上での悩みや工夫、ぶつかっている壁や将来の展望等について、学生の目線で語り合います。大学間のネットワークづくりのきっかけとなる分科会です。参加される方はできるだけ実践事例をご用意ください。
ただ今ご紹介いただきました日本学生支援機構理事の大浦道徳でございます。本日はこの集いを開催するにあたりまして、一言ご挨拶を申し上げます。本日は、皆さま全国各地からご参集いただき、誠にありがとうございます。また、文部科学省からは、生涯学習政策局社会教育課の山本専門官、各シンポジウム分科会のコーディネーター、各先生方も大変お忙しい中、ご出席いただきご協力をいただいております。誠にありがとうございます。

私ども支援機構は、今後とも皆さま方に対し、より有意義な研修会を実施いたしますとともに、学生のために総合的な支援事業を行う機関としまして、業務をより効果効率的に行っていく所存でありますが、それには大学、または関係者の皆さま方のご支援・ご協力が不可欠であります。今後とも支援機構に対しまして、引き続きよろしくご協力のほどお願い申し上げます。

ちょうど良い機会でありますので、私ども支援機構の今の状況等について、簡単にご説明申し上げます。

ご存じのように、奨学金の貸与事業、留学生事業、その他学生生活支援事業、大きくはこの3つの事業を行っております。

奨学金事業につきましては、旧育英会から引き継いでおりまして、現在までに700万人の学生を排出しております。金額にして6兆円の貸与を行ってきたようであります。今後も今の状況でいきますと、家計支持者の離職や自殺を含めた事故等による家計急変、未だに社会の全体の中には、学生の親御さん達のそういう状況があり、奨学金はこれまでと変わらず、必要とされております。これからも勉学意欲のある学生を経済的に支援し、我が国の次代を担う人材の育成に貢献してまいりたいと思っております。ご参考に申し上げますと、平成18年度の概算要求におきましては、たまたも政府原案がるで予定でありますが、無利子・有利子ともに、新たな奨学生の採用ができますように、新規増員の要求を行っております。

留学生支援事業につきましては、国費奨学金の支給、宿舍の整備、日本留学試験の実施などを行っております。留学生受入れに際しましては、既にこの5月で12万2,000人を超えおります。今後は留学生の確保にさらなる質の向上が課題であります。これからの留
学生が安心して留学に励み、将来、我が国に好印象を持って帰国し、将来、我が国に好印象を持って帰国し、今後の我が国の良き理解者となってもらえるよう、そういう留学生を全力で支援してまいりたいと考えております。18年度につきましては、私費留学生が極めて増えておりますので、そういう学生に対する学習奨励費の増員をお願いしているところであります。

3つ目の学生生活支援事業ですが、大学、高専等における教職員の皆さま方のお役に立てるように学生指導・就職関係などの分野につきまして、各種研修会等の開催を行っております。また、情報の収集・提供にも努めてまいりのような所存であります。今年度につきましては、全国各地31回の研修会等を開催しましたところですが、学生相談業務に何が支援できるかという視点で、大学のいわゆる相談窓口の件数が増えている、そういう状況を踏まえ、なんらかの支援策が必要だろうということで、学生相談体制の整備に資する調査・研究会を機構の側に立ち上げまして、関係の学識の先生方のご協力を得て、検討を開始したところです。現在の社会状況の変化とともに、学生を取り巻く環境、価値観とも、次第に変わってきております。それに即した対応が求められるところではありますが、この集いにおいて、さまざまな情報を収集し、活発なご議論をいただき、新たな時代に対応していくための積み上げた存在を含んでいただければ幸いだと思っております。

学生ボランティア活動につきましては、皆さま既にご承知のように、阪神淡路を契機としまして、地域社会における学生自身のボランティア意識も急速な高みを見せているところです。最近では新潟中越地震に際しましても、学生ボランティアの活躍が報道されたところです。このような活動の積み重ねの結果、学生のボランティア活動は、地域から取り上げ、益々期待されてくるものと確信しております。一方、これからの大学等に期待されることとして、地域貢献・地域連帯が重視されております。学生ボランティアはまさしく地域と密着した活動であります。また、学生にボランティア活動のきっかけを与え、裾野を広げていくことが、若者の育成に必要ではないかと考えております。既に積極的に行動している学生のボランティア活動を受入れ機関やボランティア団体、地域の行政機関と緊密に連携しながら、これらの支援・促進していくことは私どもの重要な課題であると考えております。

今日のこの集いのシンポジウムにおきまして、各テーマの中で、それぞれ事例紹介、情報交換、意見交換をしていただき、さまざまな課題の解決に寄与できれば幸いと考えております。最後になりましたが、この集い開催のご準備などに多大なご協力をいただきました企画実行委員の皆先生方に厚く御礼申し上げます。また、ここにご出席の皆さま方にとりまして、実りあるものとなりますよう祈念致しまして、簡単ではありますが私の挨拶と代えさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。（拍手）
第1部 全体会

1. 講演

「ボランティア活動の推進による地域教育力の再生」

文部科学省 生涯学習政策局社会教育課
ボランティア活動推進専門官 山本 昌博 氏

どうも皆さん、おはようございます。本日はこういう会にお招きをいただきまして、ありがとうございます。本来であれば、高等教育局の方からご説明すればよろしいのでしょうが、生涯学習政策局社会教育課の山本からご説明申し上げたいと思います。

資料がございますので、それに沿ったかたちでご説明させていただきます。そもそもボランティア活動につきましては、災害ボランティアであれば内閣府や国土交通省が所掌し、介護とか福祉関係なら厚生労働省というようなことで、文部科学省におきましては、学校教育あるいは社会教育にご支援をしていたくボランティアのほか、児童生徒、あるいは地域住民の方々がボランティア活動を理解したり、あるいは関心を持つようなきっかけづくりということに努めているところです。大学での単位認定なども、そのきっかけづくりのひとつのになるのではないかと思います。

資料の、奉仕活動・体験活動ということが載っております。どちらかというと、大学というよりは小・中学校・高校、あるいは地域住民を主に対象にしているような事業が多いので、奉仕活動あるいは体験活動というような括りにしております。

教育改革国民会議が、平成12年に報告を出しております。この時代的な背景としては、佐賀の高校生の西鉄のバスジャック事件ということがございました。そういった青少年の凶悪事件が多発しているということなども背景に、教育改革国民会議の報告の中で人間性豊かな日本人を育成するということで、奉仕活動を進めることが必要であると提言されました。提言の内容が3つあり、その（3）に将来的には満18歳前後の青年が、大学1年生や2年生相当の年齢だと思いますが、そういった年齢時に一定期間、さまざまな分野において、奉仕活動を行うことを検討すると、ここまです提言しているわけです。検討するということは、何らかの形でそのような経験を大いに積んでもらった方がいいということです。

この報告を受けて、平成13年7月に学校教育法と社会教育法を改正し、青少年に対するボランティア活動の奨励などにつきまして、市町村教育委員会の事務として明確に規定しました。さらにその後、平成14年の中教審答申、これは青少年の奉仕活動等の推進につい
て答申したものですが、18歳以降の個人が行うボランティア活動等の奨励支援のために、大学などにおいて、学生が行うボランティア活動などを積極的に奨励するよう、正規の教育活動として、ボランティア講座やNPOに関する専門科目等の開設、あるいはインターンシップなども含め、学生の自発的なボランティア活動等の単位認定を積極的に進めたり、学生の自主的な活動を奨励・支援することが重要としています。そのために、大学ボランティアセンターの開設など学内のサポート体制の充実、セメスター制の導入、ボランティア休学制度など、学生が活動しやすい環境整備をしたり、大学の学内でボランティア活動等の機会の提供などに取り組むことが望ましいということをご提言いただいています。

では、文部科学省では実際にどういうことをやっているかというと、ボランティア活動そのものの予算は、生涯学習政策局で措置しておりますが、これ以外に直接的な予算は省内ではないというような状況で、事業費については来年度も今年度と同額の5億7,100万円を概算としているという状況です。ボランティア活動は自発的な活動で、また、様々な分野にまたがるということで、どうしても予算要求までは至っていないうちの状況です。また、財務省の方にもボランティア活動の予算要求をすれば、「なんでボランティアなのにお金が必要なのか。」というような質問を受けるわけですが。しかし、ボランティア活動を行うにあたっては、例えば指導者がいたり、活動する際にも、清掃ボランティアであればゴミ袋が必要であったり、旅費が必要になったりとか様々な経費が必要になりますので、そういったことはどうしても自発的活動であっても必要になります。我々もきっかけづくりということで、こういった地域でのボランティアの取組をさらに広げていただくために、予算措置をしているということです。

事業は大きく2つに分かれておりまして、広報啓発、それから地域のボランティア活動推進事業というモデル事業の2本立てです。モデル事業のイメージ図がありますが、全国705地域で、対象を子供から高齢者までの幅広い年齢層の住民を相手にした事業と、それから高校生に特化した事業の、2つに分かれています。

事業内容については、花植えボランティアや清掃ボランティアなど、様々な活動をいろいろな場所で実施していただくもので、きっかけづくりのためにも、是非大学生の方々もこうした活動にご参加いただければと思います。また、本日ご出席の大学生の方々におかれましては、様々なボランティア活動を体験された方もいらっしゃると思いますので、指導者あるいは助言者として活躍していただければと、ご期待申し上げるところでございます。こうした事業は、市町村の教育委員会等で企画していますので、大学のサークル等でこういった事業を行って地域を良くしたいというようなことがありましたら、市町村の教育委員会に事業企画を持ち込むなどしていただければと思います。

具体的な取組例を参考にしていただければと思いますが、この資料自体が財務省に説明した資料で、所要経費が入っていますので、この辺は無視していただければと思います。

資料に、様々な地域でのボランティア活動を少し取りまとめたものがございますので、
ご参考にしていただければと思います。
この事業が2本立てということで、もう一つのボランティア活動の広報啓発普及事業というものがあります。3,000万円余りの事業ですが、ボランティア活動の推進のための全国フォーラムの開催や、ポケモンをイメージキャラクターとして使ったポスターを全国の小・中学校、あるいは社会教育施設などに配布しておりますが、是非皆さんもお持ち帰りいただき、目立つところに張っていただければと思います。さらには、ボランティアに関するホームページも設けておりますので、是非アクセスしていただき、ご覧いただければと思います。
今年の全国フォーラムについては、「フォーラムの開催」というのがございます。2月18日に、TOKYO FMホールにおきまして全国フォーラムを、また西日本大会ということで、山口県のご協力を得まして、1月15日にも地方のフォーラムを開催することとしております。まもなく文科省のホームページにも詳細をアップする予定でございます。1月15日のフォーラムでの基調講演は、この後のシンポジウムの総合司会をされます興梠（こおり）先生にお願いしていますので、是非こちらもご参加いただければと思います。
次に、地域における防犯教育等の推進について、警察庁と連携して、安全・安心な地域を創っていくということで、防犯に関する講座等を実施する際に、警察官や警察のOBの方々が指導者となっていただいており、あるいは先ほどの地域ボランティア推進事業で防犯を取り上げたときのオリエンテーションなどで、警察官などの指導・助言、場合によっては一緒に巡回していただけるというものです。本年6月末現在で、防犯のボランティア団体が全国で1万4,000団体ございまして、15年末では3,000団体ということで、この1年半で4.6倍と大幅に増えております。また、構成員も80万人で、15年末の18万人と比べてこちらも4.5倍と大幅に増加しています。
具体的な例として、仙台市のボランティア活動の新聞情報に載っておりますが、フリークラブやここでは東北大学の学生が防犯グループを結成して、活動しているということで、このほかに島根大学の方でも職員や学生さんが公民館や地域住民と協力してパトロールなどを行っているというようなことも伺っております。こうした取組をぜひ積極的に実施していただければと思います。
また、11月22日には広島市、あるいは12月1日に今市市で下校途中の女子児童が事件に遭い、殺害されるというような、あってはならない事件が連続して発生いたしました。再び起こらないよう、こういった活動にも是非目を向けていただければと思います。
さて、文部科学省が大学について全く何もやっていないというわけではなく、私どもがシンクタンクにお願いをし、ボランティア活動の先進的な事例を集めました。この報告書
の第1部だけを本日資料として掲載しておりますが、全体版は、文部科学省のホームページに掲載しておりますので、ご覧いただければと思います。

それでは、第1部ですが、ボランティア活動の運営にあたりましては、企画段階、活動準備、活動実施、事後に分けて留意すべき点を整理しています。内容については、主に地域での活動を想定しているわけですが、報告書の中に大学生のボランティア活動が幾つか紹介されています。

例えば、麻布大学の淵野辺ボンバイエというのがございます。これは、環境保健学部の倉山ゼミのゼミ生が中心となって、参加型の交流イベントを企画運営しているもので、学生、子供達、ＮＰＯなども含めて、新たな交流・つながりをつくるために、大学の「地域連携プラットフォーム」シンポジウム、あるいは学生と商店街の活動を紹介する「淵野辺スライドショー」とか「子供エコ探検ツアー」報告会とか、そういったさまざまな交流事業が行われています。

東北福祉大学のボランティアセンターの例を示しておりますが、学外より広くボランティアの依頼を受け付け、情報提供を行うことで活動を斡旋しています。学生のボランティア活動について、年間1単位を上限として単位認定をしている状況です。

広島市のユースボランティア・サポートセンターは、市の教育委員会が、広島市に住む学生を対象として、活動内容は小・中学生の体験・交流活動の機会を紹介したり、ボランティア希望者とのマッチングやボランティア研修などを実施しているということです。

高知のTMOエコスターズでは、高知市の商工会議所が高知女子大学に呼びかけまして結成された学生の団体「エコスターズ」が、清掃をはじめとした商店街の活性化に向けたさまざまな活動を行っているという事例です。

さらには、明海大学につきましては、副専攻キャリアアッププログラムとして、実際の活動実習を含んだボランティアの授業を設置しております。また、浦安市からボランティアのメニューが提供され、そこから学生が自由に活動を選択でき、活動終了後には市から活動証明書が発行されるようなことで、浦安市が大きくバックアップしているというような事例です。

このほか、この報告書には北海道医療大学のボランティアセンターの事例なども紹介されており、どの事業も年々活発化しているというような状況のようです。それぞれの参考事例の詳細なことが第2部にございますので、是非お帰りになりましたらホームページをご覧いただければと思います。

最後に文部科学省のボランティア活動、体験活動の事業の一覧表を資料に掲載しております。これは概算要求ベースでお示ししておりますが、ご参考にしていただければと思います。

学生の皆さまが、今後一層ボランティア活動に関心を持っていただき、積極的に活動をしていただければと思いますし、ボランティアの活動の指導者、あるいは助言者としても
ご活躍いただきたいと思います。また、先生方や事務局の方々におかれてても、学生のボランティア活動のご支援をよろしくお願いしたいと思いますが、事例にもございますように、大学内だけで完結するということではありませんので、広く様々な行政機関、あるいはNPOなどとも連携し、ボランティア活動の輪を広げていただきたいと思います。

内閣府が、本年度実施しました世論調査を見ますと、国民の６割の方がボランティア活動に参加したいという状況ですので、当然学生の方々も参加したい方は多いというふうに思っております。ボランティア活動に対する大学の予算措置というのは、なかなか難しいというような状況だと思いますが、例えば、先ほどありましたように、単位認定を行うとか、学長がボランティアをしている人たちを呼んで食事会を開くとか、そういった何らかのインセンティブを考えていただき、ボランティア活動の輪を広げてもらいたいと思います。また、学生達が、がんばっているということを副学長や学長、理事長なりに報告していただくことも大変重要であると思います。また、こういった例は、私立大学では結構やっているのですが、国立大学のボランティア活動に対する取組というのは、どちらかというと流れに任せているような感じではないかと思っております。大学がボランティア活動を活用するという発想は良くないかもしれませんが、是非大学の社会貢献の１つとしてがんばっていただければと思いますし、皆さま方個人の年度目標として掲げていただければと思います。

以上、簡単でしたが、文部科学省の取組を紹介させていただきました。また、何か困ったことがありましたら、私どもにご相談いただければと思います。本日は、どうもありがとうございました。（拍手）
2. シンポジウム

「大学になぜボランティアセンター機能が必要なのか」

＜総合司会＞
興梠 宽 氏（社会福祉法人世田谷ボランティア協会理事長）

＜シンポジスト＞
田中 芳則氏（広島大学障害学生支援のためのボランティア活動室 助教授）
山本 和氏（国際基督教大学 総務理事）
和栗 百恵氏（中央大学総合政策学部 特任講師）

興梠 皆さん、こんにちは。興梠と申します。今日は、主催者の日本学生支援機構のお話を寄せて集まっていたけどというお話を使っていたのです。250人というたくさんの方にご参加いただきまして、私自身もこの企画の実行委員会に参加をしておりまして感謝を申し上げたいと思います。今から1時間半ほどの短い時間なので、今日は3人のゲストの皆さまをお迎え致しまして、シンポジウムをさせていただきます。

今日のテーマは、「大学になぜボランティアセンター機能が必要なのか」ということなので、特に副題がついておりまして、今流行りの言葉なのですが、国際的にも持続可能なコーディネーションシステムを築くためにということでお話をさせていただきました。

冒頭、私のほうから少しだけ今日の趣旨にまつわるお話をしていただき、早速3人の方々のお話を伺おうと思うのですが、私個人が今から2週間ほど前に、約1週間イギリスのロンドンに行きまして、日本の大学の研究者4人とNPOの関係者、日本とEUの関係者との国際的な会議が行われました。これは、政府間の会議で、日本では内閣府、文部科学省、外務省、またもも世話役の国際交流基金が参加して、そしてEUの関係者と、日本とEUとのあいだで話し合っていくというものなので、そのテーマが「青少年にまつわる問題」です。当然、日本とEUの諸国とは、青少年の社会的な背景そのものも違うわけではないのですが、3つのテーマで話し合いが行われたわけです。

冒頭、私のほうから少しだけ今日の趣旨にまつわるお話をしていただき、早速3人の方々のお話を伺おうと思うのですが、私個人が今から2週間ほど前に、約1週間イギリスのロンドンに行きまして、日本の大学の研究者4人とNPOの関係者、日本とEUの関係者との国際的な会議が行われました。これは、政府間の会議で、日本では内閣府、文部科学省、外務省、またもも世話役の国際交流基金が参加して、そしてEUの関係者と、日本とEUとのあいだで話し合っていくというものなので、そのテーマが「青少年にまつわる問題」です。当然、日本とEUの諸国とは、青少年の社会的な背景そのものも違うわけなので、3つのテーマで話し合いが行われたわけです。

冒頭、私のほうから少しだけ今日の趣旨にまつわるお話をしていただき、早速3人の方々のお話を伺おうと思うのですが、私個人が今から2週間ほど前に、約1週間イギリスのロンドンに行きまして、日本の大学の研究者4人とNPOの関係者、日本とEUの関係者との国際的な会議が行われました。これは、政府間の会議で、日本では内閣府、文部科学省、外務省、またもも世話役の国際交流基金が参加して、そしてEUの関係者と、日本とEUとのあいだで話し合っていくというものなので、そのテーマが「青少年にまつわる問題」です。当然、日本とEUの諸国とは、青少年の社会的な背景そのものも違うわけなので、3つのテーマで話し合いが行われたわけです。

冒頭、私のほうから少しだけ今日の趣旨にまつわるお話をしていただき、早速3人の方々のお話を伺おうと思うのですが、私個人が今から2週間ほど前に、約1週間イギリスのロンドンに行きまして、日本の大学の研究者4人とNPOの関係者、日本とEUの関係者との国際的な会議が行われました。これは、政府間の会議で、日本では内閣府、文部科学省、外務省、またもも世話役の国際交流基金が参加して、そしてEUの関係者と、日本とEUとのあいだで話し合っていくというものなので、そのテーマが「青少年にまつわる問題」です。当然、日本とEUの諸国とは、青少年の社会的な背景そのものも違うわけなので、3つのテーマで話し合いが行われたわけです。

冒頭、私のほうから少しだけ今日の趣旨にまつわるお話をしていただき、早速3人の方々のお話を伺おうと思うのですが、私個人が今から2週間ほど前に、約1週間イギリスのロンドンに行きまして、日本の大学の研究者4人とNPOの関係者、日本とEUの関係者との国際的な会議が行われました。これは、政府間の会議で、日本では内閣府、文部科学省、外務省、またもも世話役の国際交流基金が参加して、そしてEUの関係者と、日本とEUとのあいだで話し合っていくというものなので、そのテーマが「青少年にまつわる問題」です。当然、日本とEUの諸国とは、青少年の社会的な背景そのものも違うわけなので、3つのテーマで話し合いが行われたわけです。

冒頭、私のほうから少しだけ今日の趣旨にまつわるお話をしていただき、早速3人の方々のお話を伺おうと思うのですが、私個人が今から2週間ほど前に、約1週間イギリスのロンドンに行きまして、日本の大学の研究者4人とNPOの関係者、日本とEUの関係者との国際的な会議が行われました。これは、政府間の会議で、日本では内閣府、文部科学省、外務省、またもも世話役の国際交流基金が参加して、そしてEUの関係者と、日本とEUとのあいだで話し合っていくというものなので、そのテーマが「青少年にまつわる問題」です。当然、日本とEUの諸国とは、青少年の社会的な背景そのものも違うわけなので、3つのテーマで話し合いが行われたわけです。
不適応」の問題です。対人コミュニケーション、また社会とのコミュニケーションというもの、不得手な若者達の問題です。３つ目は、「社会参加」ということで、青少年のボランティアを含めて文化的、道徳的、社会的、そして政治的参加の芽をどうやって育てていけばいいのかということで話し合いが行われました。

その中で、この３つのテーマで研究者同士の話し合いが行われましたが、共通していつも出てくる言葉が、実はボランティアというキーワードだったわけです。中でも特に、高等教育の役割というものが大変重要で、日本とEUとの間で、これから積極的に具体的な取り組みというものをしていくというような緩やかな合意がなされて、この会議が終わったわけです。おそらく1カ月くらい後に、外務省などのホームページでそのことが発表されるのではないかと思います。いまや、大学等高等教育において、教育システムとしてのボランティアへの取り組みというものは、何も日本だけの問題ではなくて、実はヨーロッパ、アメリカ共通した課題でもあります。また、発展途上国においても、すでに1960年代から「スタディ・サービス」などの、大学がボランティアをとおした教育や、学生に対するボランティア活動支援に取り組んでいたわけです。

私は、かなり長い間欧米のボランティア教育などの調査研究をさせていただいております。今日は、国際基督教大学の山本先生が来られておりますが、アメリカの大学においては、「サービス・ラーニング」への取り組みは一般的になっております。大学というもの、ボランティア活動の持つ潜在的な教育力というものを、アカデミズム、すなわち教科を結び付けて新たな総合知というカリキュラムに高めていくことへの取り組みが行われている。教科学習において、学生自らが学習的な目的を設定した上で、ボランティア活動の持つ教育力を活用しながら地域社会や地球社会をフィールドにして学ぶ。そうした取り組みというもののがアメリカで広がっているわけです。

日本でもご存じのように、大学において、ボランティア活動に関する何らかの情報提供や支援をしていく窓口を設置しているところというのは、80％を既に超えております、さまざまな取り組みが行われております。しかし、一方でそういった環境ができつつあるとはいえ、大学の中にそういったボランティア・システムをきちんと位置付け、それを支援・サポートしていくような仕組みというものが出来上がっているかということになると、まだまだ発展途上の状況だと思います。

今日は、シンポジストのみなさまと一緒に、大学にそうした機能や環境をつくり上げていくことについて話し合いたいと思います。また、私たちが大学教育において、学生のボランティア活動支援を行っていくうえでいろいろな困難な問題があるだろうと思います。今日は、短く時間ですが、私たちが大学により持続可能なボランティア・コーディネーショングのシステムというものを使っていくために問題提起をさせていただき、また午後に予定されている分科会での皆さんの話し合いの参考にしていたければと思います。ということであれば、今から３人の方々に取り組みなどのお話を伺いたいと思っております。

1つは、それぞれの大学がこのような学生のボランティアをサポートしていくコーディ
ネーションの仕組みというものがつくられた背景。また、その仕組みや機能というものがどのような方法によって運営されているのか。そしてまた、コーディネーション・活動の具体的な内容。それらについて、15 分ぐらいずつ各シンポジストの皆さんに発表していただき、また、それを深めていきたいと思います。

最初にお願いしておりますのは、広島大学からいらっしゃっております田中さんです。障害学生支援のためのボランティア活動室ということと、もちろん教鞭も執られている田中さん、田中さんのほうにお願いをしたいと思います。よろしくお願いいたします。

田中 おはようございます。広島大学障害学生支援のためのボランティア活動室の田中と言います。私は、2002年に広島大学のほうに移りまして、はじめのころから障害学生支援をしております。今回この話をいただいて、自分でもあらためて広島大学の中のコーディネーターの仕組みというのを、今日事例を含めてお話させていただきたいと思います。パワーポイントのほうを使ってお話をしていただきます。

広島大学は、全学的に障害学生支援をしています。2002年になり、この障害学生支援をより実際的に行うということで、専任教員を採用しました。それが私です。それから、コーディネーション機能ということで今日はお話をさせていただきますが、情報支援コーディネーターという、専任の私が非常に勤励のコーディネーターがおります。それから平成16年に、特色GP（特色ある大学教育支援プログラム）に採択されましたので、それに伴い、ユニバーサルデザイン化推進の担当教員、それから専任の事務教員を加え、現在4名でボランティア活動室は活動をしております。

まず背景ですが、たぶん、どこの大学でも状況は同じだと思います。広島大学も当初同じでした。これまで、障害のある学生さんのためのボランティア活動というと、やはり同級生、それから熱心な教職員の方が、実際にボランティア活動でその学生を支援していきました。そして多くの場合は、やはり兼務で本来の業務をしていて、そのほかに兼務でコーディネートをしていた。実際に障害の学生が授業を受ける際に、先生方への連絡であるとかレジュメ・資料とかの準備の調整であるとか、それから定期試験の場の調整もあります。場合によっては、授業の先生方と実際に障害のある学生さんがトラブルに陥った場合に、調停をするというような場合もございます。これが、できた背景は、平成12年に広島大学へ全盲の学生と高度難聴の学生が同時に入学したということがきっかけで、点読資料が必要である、それからノートを、いわゆる先生のしゃべった言葉を筆談する、今日もお見掛けするところ、前列のほうでノートをしているようなのですが、そういうノートテイカーの派遣などをコーディネートするということで始まりました。その中で気が付いたのは、やはり兼任では難しいということです。それで学内にやはり支援
体制をつくり、専任でコーディネートをする方が必要であるという現場からのニーズが出た。初めてコーディネーターを設置しよう、専任の教員を設置しようということになった。

ざっとお話しします。教育改革というのは、平成3年に大学設置基準の大綱化というものが行われました。それ以降、各大学は自由裁量で、カリキュラムが編成できるようになりました。広島大学もこの平成3年以降、自由にカリキュラムを作るということで、特に教育科目についての改革が平成9年に行われました。以前から障害学生支援をしていましたが、その頃からやはり全学体制で行われなければならないと、教職員、それから実際の障害学生のほうからの声が出ました。それに伴い、平成9年に全学組織である障害学生就学支援部会、現在は障害学生就学支援委員会という名前の全学組織ができました。そのあと、組織ができただけでは実は機能をしないので、実際には全教職員に向けて、大学の規則ができました。これは今日はたぶんお配りした『教職員のための障害学生就学支援の手引き』の後ろのページに規則等も載っておりますので、またあとでご覧ください。それから実際に、平成12年に先ほど申しました全盲の学生と高度難聴の学生が入学しましたので、そこから入学前からの一貫した支援を始めることとなりました。それに伴い、ボランティア活動室という私がいる支援活動の拠点を平成12年に立ち上げました。それから実際に今日、興梠先生にもお話をいただきましたが、持続的な活動にしなくてはいけないということで、ではボランティアの学生をどう集めようかということになりました。その当時、国立大学は、学生に対して謝金を支払うということが、かなり難しい状況でしたので、平成13年度に支援者育成のための授業をつくったらいいのではないか、そうすると授業をとってくれる学生を支援者にして、恒常的にボランティア学生を増やそうという考えを持ちました。それから13年にこの授業を開講することになりました。あとは特色G Pが採択されてまして、高等教育におけるユニバーサルデザイン化という障害学生を支援するだけではなく、実は周りの一般学生に対しても分かりやすい授業をすれば、障害学生に対応できるという考え方を探りました。障害学生就学支援に関する規則と、それから入学者選抜と、相談の指針というのがあります。

そして全学体制ですが、これは部局長会議といって、学長、副学長などが参加する会議のもと、教育担当の副学長をトップとして、トップ・ダウンで人は組織ができます。平成13年はこの副学長に、金子・基礎教育のリーダーが副学長を兼務しています。それから実際の実例である障害支援検討グループでは、それは実際には障害のある学生のいる所属学部の先生方が参加しています。現在、広島大学には6つの学部に障害のある学生さんがおりますが、その6つの学部の先生方を「支援委員」として、その支援委員の先生方が、参加し、企画立案をして支援活動をバックアップしています。それからその下に実際の実践であるボランティア活動室があり、一般の学生、そして障害学生が関わります。また、そのほかに学生スタッフとして、ティーチングアシスタントとか障害のある学生の所属学部にいる学生コーディネーターというのがいます。これは、障害のある学生とその所属学部の支援
委員の先生、あるいは授業担当の先生との仲介役・パイプ役を務めるものです。学生スタッフについては、有償のボランティアということで、謝金を支払っています。それから先ほど言いました授業の中で支援を育成するということですので、授業の中ででは謝金は支払いませんので、単位を付与するというかたちをとっています。ここで見ていたのが、部局というのは、それぞれの所属学部になりますが、あくまでその所属学部に在籍している障害のある学生さんは、その学部で責任をもつということを明確にしています。入学前から一貫して支援をしています。試験前相談、合格後相談、それから入学後の授業支援というようなかたちで支援を行っています。

今日お配りした『障害学生就学支援の手引き』というのは、広島大学の全教職員に1冊ずつ配布していますが、約2,000部配りました。それから今日は、大学の事務担当の方が多いということで、そういう事務系の話もさせていただきますが、「障害学生が窓口に来た場合にどう対応しているのか分からない」ということをよく聞きます。そのために、窓口対応パンフというのを事務部門や保健管理センター、それから図書館に配布をし、簡単なレクチャーもさせていただいています。学生教職員一体型の授業支援ですので、啓発のビデオを作り、それから先生方が主体で講演会を開き、その当事者に語ってもらいました。ここでは文学部に実は車いすの学生が入学しましたので、どういう状況で困っているかとか、どういう支援をしてほしいかという経験談を開かせていただくということをやっています。実際に事例ですが、運動機能障害の学生については、例えば広島大学はキャンパスが広いので、とても移動が大変です。ですから本人と相談をして、電動の車いすを貸し出そうということをしました。これも上級生で新しい電動車いすを買ったから、これまで使っていた自分の電動車いすを新入生に貸してあげてほしいということで、ボランティア活動室をやっております。また、教室変更ということがあります。

例えば、先ほどの文学部の学生は、文学部と教養教育を行っている総合科学部というところは、歩いて15分ぐらいあるのです。けっこう長い距離があります。車いすの移動もやはりそれに近い時間が掛かりますので、移動が困難です。次の授業に行くまでに時間が掛かってしまいます。そこで事務担当の方、特にカリキュラム担当の方とご相談をして、文学部で受ける科目なので、1年生のうちは教養科目が多いので総合科学部で受けます。ということことで、文学部の科目も総合科学部で受けて、移動がないようにしようというコーディネートをさせていただきました。あとは、車での通学も許可しようということで、事務部の方とお話しをさせていただいています。

次に、トイレの改修とか、特別なトイレを用意しなくてはいけない場合は、今度はボランティア活動室から施設の方へ依頼しました。大学には施設の改修工事を担当する方がいますが、そこと連絡を取って、トイレ改修についてコーディネートをしています。また、トイレだけでなく、専用の座いすも必要だという場合には、座いすを作っているとか、自助具製作の工房に連絡をして製作をしてもらう。これも学部経由でコーディネートをさせていただきました。それから教室での改修、右側の写真を見ていたくと、作り付けの
いすではなくて、奥のほうにパイプいすがあります。これは、車いすの学生がここに着いて勉强できるように、それも友達と一緒に座ってできるようにということで、移動できるパイプいすを使っています。これも施設部の方と活動室でコーディネートをして、実際に実現されたものです。これは保健管理センターです。実は人工呼吸器を使用している学生がいますので、トラブルがあった場合に、命にかかわりますので大変困ります。アンビューバックという一次的に人工呼吸器を代替措置する物を使って、安全面でも考えています。視覚障害の場合には、拡大読書器等を貸し出す。ただ、授業の先生方は、初めて見る機械なので、「これは何だ？何を持ってきたんだ？」というように思われてしまうので、授業担当の先生の同意・了承を得た上でやらなくてはいけません。そのためにボランティア活動室が、やはり授業担当の先生とも交渉してコーディネートをさせていただいています。機器設置、あるいは機器の持ち込みについては、全て授業担当の先生とコーディネートをしなくてはいけないので、学部をまたがって、例えば教育学部の学生さんの授業に、こういう特別な機器を設置する場合には、総合科学部から教育学部に依頼を出して、そして教育学部から実際の授業担当の先生に依頼をするという組織立てが必要になります。このコーディネートをボランティア活動室でやっていますし、全学的な組織である障害学生就学支援委員会のほうで責任をもっているというようになります。

これも視覚障害の学生のために、手元でビデオが見えるように、出力を分岐してみえるようなかたちにしています。もちろん、その場合には、左の写真のように、ここは一般の学生が座らないようにということで、貼り紙を大学の教務課のほうにしていただきました。ここでもやはり教務課との連携が必要になっています。それから聴覚障害生の場合には、ノートテイカーの配置、それからビデオの文字おき、字幕挿入とかで支援が必要になります。それから特に英語の授業では、リスニングがありますので、聴覚障害生の学生の場合には困ってしまいます。リスニングが難しいので、例えば作文を中心の授業にしてもらうとかということで、個々の授業担当の先生との交渉・コーディネートで、聴覚障害の学生が困らないようにしています。

ボランティア活動室は、日常の支援の拠点です。支援学生の育成を授業という場で行っていますし、学生の実習室でもあります。「障害者支援ボランティア概論」という授業と、実際に支援者育成、実際に障害学生の授業の支援をする学生は、「障害学生支援ボランティア実習」というのを履修していただきます。それでノートテイカーであるとかビデオの文字おき、それから全盲の学生の点読であるとかということを授業の中でやっています。大体、年間100名ぐらいの履修登録数があります。授業は、実は後期で言うと12コマ開講しています。ここは、学生の随分に合わせていること、それから例えば聴覚障害の学生の授業にノートテイカーを派遣しなくてはいけないので、そのノートテイカー派遣と実習のボランティア学生が合う時間帯でコーディネートする必要がありますので、実は授業の場でもコーディネートをしています。このように教育研究の整備とか改善をしていきましたし、
障害学生支援委員会を設置しております。規則もつくりました。それから、やはり専任のコーディネーターが必要になっています。

広島大学の場合、全学的組織で、やはりニーズというのは障害学生が出しました。そのニーズを基に、それがボトムアップし、それから部局長会議（教育副学長）下にある障害学生就学支援委員会からトップ・ダウンで、実は支援活動が行われています。このようなかたちで先ほどもお見せしましたが、トップ・ダウンで実は支援活動システム化が図られました。繰り返しますが、平成12年の9月にこのボランティア活動室、当時は点訳室という名前で、ボランティア活動の拠点ができました。それから専任の支援者育成のための教員が採用されました。それから教職員、障害学生、それから支援学生をコーディネートするコーディネーターが設置されております。このコーディネートには、ボランティアのデータベースを実はつくっていて、データベース化されていますので、スムーズなコーディネートができるように現在しております。以上です。

興梠 どうもありがとうございました。具体的なケアを必要とする人々（学生達）を、いかにケアしていくかというところから、全学的な取り組みへ発展していったといういろいろなお話をしていただきました。どうもありがとうございました。

次は、国際基督教大学の山本さんにお話をいただくわけですが、日本でも皆さん、「サービス・ラーニング」という言葉はまだまるで耳に新しいのではないかと思いますが、昨今の文部科学省が大学におけるGP（グッド・プラクティス）において支援を行っていくときに、いろいろなかたちでこの言葉が登場するようになってまいりました。しかし、まだまだ大学における取り組みというのは、多い方ではないと思います。私もアメリカで調査したとき、いろいろ資料を読んでいきますと、アメリカでは、1960年代ぐらいから徐々にそういう取り組みが行われようになってまいりました。そして、既に1985年には、ブラウントン大学やジョージタウン大学、そしてスタンフォード大学の学長さん達が中心になって、全米の大学に呼びかけて学長自らが署名をして、2003年の段階では、全米で約950校以上の大学が、『キャンパスコンパクト』というような全米大学ネットワークを組織して参画をしております。950以上の大学がサービス・ラーニングに関する取り組みをそしてネットワークに加盟している。州でいうと、全米49州にわたってこうした取り組みが行われております。

サービス・ラーニングこれも山本さんにお話いただくわけですが、ボランティア活動の持つ潜在的な教育力というものと、アカデミックな教科というものを融合していいく。その内容は、あらかじめ大学側が設定した教科科目とボランティア学習をとを連動させたサービス・ラーニングの教育計画をすれば、むしろ学生自らが学習テーマを設定しボランティア学習をしながら学んでいくという方法もあります。そのように、多様ななかたちで行われているわけです。

国際基督教大学では、全国の大学に先駆けてサービス・ラーニングセンターを設置し、全学的な取り組みを行っております。そういった先駆的な取り組みをされております山本さんにお話をいただきたいと思います。では、よろしくお願いいたします。
山本 ありがとうございます。国際基督教大学の山本でございます。私どもの大学は、わりに小さい大学です。学部が 2,800 人ぐらいです。大学院を入れて 3,000 人ぐらいのわりに少人数の大学としてやっています。1つの大きな教養学部の中にいろいろな領域がある。どういう大学かによってボランティア活動を教科に結び付けるにいろんなパターンがあるという意味で、ICU のバックグラウンドをまずご紹介を申し上げたいと思います。

私どもがこれまでどのようなことをやってきたかということが、お配りしました資料の 56 ページから書いてございます。今、ご説明のありましたアメリカのキャンパスコンパクトなど、サービス・ラーニングの発展の経緯についても書いてございますので、ご覧いただければご理解をいただけると思います。64 ページ以降の資料などをご覧いただきながら、簡単にご説明したいと思います。

サービス・ラーニングというのは、簡単にいうとボランティア活動を勉強に結び付けるプログラムです。これをサービス活動と英語では言うわけで、サービス活動をやることを通じて学ぶ、あるいは学びながらサービスの中身を良くしていくことを重視した取り組みます。今、世界的にサービス・ラーニングという考えが非常にポピュラーになってきているという状況ですから、平たく言えばボランティア活動を、どのように大学教育のカリキュラムに取り込んでいくか、そういう努力が注目されているのだというふうにお考えをいただきたいと思います。

お配りした私の文章のサービス・ラーニングとは何かというところにも書いておりますし、センターのパンフレットにも書いておりますが、基本的にサービスをやる、あるいは奉仕活動をやるということから学ぶところはたくさんあるし、また、サービスをやることにより、学生達が得るものも大きいわけですが、それが大学の教科として意味があるには、学ぶ部分についてある程度しっかりした考え方がなければならぬわけです。私どもは、サービス・ラーニングをやることにより、単位を付与しますが、単位を付与する大学の教育プログラムであるからには、それなりの中身がなければならないという考え方でプログラムの構築を図ってきたわけでございます。

サービス・ラーニングの概念（資料 64 ページ上）をご覧いただきますと、我々が今まで教室で学んだことを実際に体験してみるということは、それ自身に立つことですから、非常に良いことではありますが、やってみてうまくいかないことがたくさんあって、そのうまくいかないことから、実際に現実の世界というのは、頭で考えるのとは違うということが、分かってきます。そこからその意味を内省する、英語でリフレクション（Reflection）という言葉を使うのですが、なぜうまく行かないのかを考えるプロセスが始まる。現実の中から学び取り、新たに知識に加えていくというその学びの過程を重視したプログラムなのでしょう。ですから、サービスラーニングはリフレクションを行うことが、非常に大事であ
り、活動したことから学んで、そしてその人の将来のために、さらなるアクションにつなげていくのか、そのところをどのようにしてプログラムに組み込んでいくかということが、大事なプログラムであろうと考えています。ですから、やはり学生の側にやってみたいという気持ちとコミットメントがあるということが、まず初めにあり、それに対して子どもが、大学としてそれをできるように事前の準備をサポートし、実際に出て行く。出て行くけれども、ただそれだけでは終わらずに、実際の体験から何かを学び、将来の展望を持てるような取り組みとしていきたい。カリキュラムに組み込まれるのはどうしたらいいかを考えて、プログラムを実施する。子どもの場合は、合計 30 日分 240 時間は、やってくださると思います。そういう状況です。

子どもは、割合に海外に関心のある学生が多いということもありまして、国際的な展開という側面を重視しています。しかし、キャンパスの中や周辺でも先ほど広島大学の発表にもございましたが、同じように、例えば盲人の学生をどうやって支援するかというのもひとつのサービスであると考えて、例えば点字訳のサービスをするというプログラムもある。三鷹市のようなところで、夏休みにインターンシップをして、調査をやりったりゴミをやったりして、地域のコミュニティーに奉仕する活動も含まれています。また、海外に出掛けていて、海外協力団体のNGO国境なき医師団、シャプラー（民間海外協力団体NGO）、ユニセフなどいうところでも体験をする。国際性を強調したプログラムも盛んです。最近はそういうサービス先のネットワークが広がっています。

また本学の特色的な取り組みとして資料に書いてありますように、サービス・ラーニングに関心のあるアジアの10ほどの大学と提携をして、そこに学生を派遣し、提携先の大学がコンタクトをもっている地域のサービス活動、例えばエイズ対策や孤児院などで奉仕をするようなプログラムを、タイ、インド、中国などで実施してきました。基本的な考え方は、ボランティア的な活動をどのようにして意義のあるように広げていくかというシステムづくりに取り組んでいます。いろいろとメニューがたくさんあって、ちょっと欲張ったプログラムなのです。もちろんこれを、マネージするほんのとかなり大変でございますが、危機管理などに気をつかいながらやってきています。

大学と提携してやるプログラムは、提携している大学が、それなりの責任をもって学生をちゃんとところに配慮してくれたり、寮に入れてくれたりというようなことをやってくれますので、危機管理という点からも安心感があります。いろいろなメカニズムを併用しながら運営しているのが実情です。

資料の3に、今まで実施してきたプログラムを年表形式でまとめていますが、本学は、キリスト教主義、リベラル・アーツ、国際性を強調しているわけで、そういう意味からいえば、もちろん良いことのために奉仕をしましょうというのは、大学の教育の理念に結び付くわけです。96 年に私が国際関係学科の教授であったころの話ですが、国際インターンシップを始めまして、それに初めて単位を付与することを開始して、そしていろいろそういう分野のエキスパートである先生を客員教授で招聘（しょうへい）して、がんばってやって
でのリフレクションのところに結びつけていくことが、よいプログラムにするための課題である。そのためには、やはり多くの先生達に協力してもらうと困るし、それぞれの分野に、関連したプログラムを作ってもらえるといいと思っています。先ほど申し上げましたように、本学はわりと小さなリベラル・アーツの大学ですから、どの分野からも参加できるというシステムにしております。それぞれの時間ではないかと思いますので、その程度にさせていただいて、もう少し具体的には資料をお読みいただければと思います。ありがとうございました。

興梠 どうもありがとうございました。あとでいろいろお話いただければと思います。それでは、今度は大変大きな規模の大学をお紹介しましょう。中央大学総合政策学部から来ていただいております。中央大学総合政策学部は、さまざまな先駆的な取り組みをして大変注目されている大学なのです。特に今日は、経験学習プログラムという広い概念から、総合政策学部の取り組みをお話いただきたくと思います。

具体的に実際に学生と接しながら、大学におけるコーディネーションの活動を行っている和栗さんです。では、よろしくお願いいたします。
和栗よろしくお願いいたします。中央大学総合政策学部で特任講師をしております和栗百恵と申します。今日はよろしくお願いいたします。今日、皆さんに私からお話することについて、自己紹介を兼ねて最初にお話しいたします。

今、私の身分を「特任講師」と申し上げたのですが、これが先ほどから先生方のお話の中に出ている制度化なり、大学にどう制度化するかという部分で、人間配置という観点から1つキーになっている部分だと思いま

す。専任なものの、契約期限付きというポジションです。1期2年、2期までというポジションおります。でも、プログラムをゼロからつくるような状態で行ってきて、この間、丸々3年間プログラムをつくっています。2002年度より私が担当してきたのは、科目名で「国際インターンシップ」で、現在のカリキュラムでは「アクションラーニングプログラムス（Action Learning Programs）」と呼ばれているものです。あくまでも1科目1授業の担当の教員ということで、例えば広島大学さん、ＩＣＵさんと違うところは、ボランティアセンターなり、サービス・ラーニングセンターなり、そのセンター機能を請け負っているわけではなく、1科目を担当する教員として来ております。中央大学では、お恥ずかしいことに、まだボランティアセンターを持っておらず、現在のところ学生部の中に1人職員の方がいらっしゃって、その方がコーディネーションをなさっていらっしゃいますが、まだ、きちっとと制度化されているような状況ではありません。その方もまだ若い女性の方なので、なかなか制度化されない中で模索なさっている段階です。

今日、私がお話することは、あくまでも総合政策学部の中の実践についてなのですが、学部の中ではこれをボランティアと呼んでいません。非常に残念なことなのであるが、ボランティアというと、それは小中高でやることだろうというような理解があると思います。

そこで、私たちの場合は、文科省の特色GPに選出された「アカデミックインターンシップの全学的展開」の中で、少しでも学生達がボランティアと呼ばれるもの、サービスというふうにＩＣＵでは呼んでいますが、そういったことに触れられる機会をつくろうとして作ったプログラムです。ですから今日お話しいくことは、持続可能なボランティアコーディネーションシステムについてのモデルケースではないかもしれませんが、そのことをまず初めにお含み置きください。

そこで、お話をするということでお話ししておりますので、ボランティアと私が担当するIIP（国際インターンナショナルプログラム）／ALPs（アクションラーニングプログラムス＝アルプス）についての話を少し差し上げます。いろいろ資料をみますと、ボランティアとは、学内外における社会体験・地域活動というふうに表されているらしいのです。私たちの「IIP／ALPs」では、その言葉を採用しています。それは、「Learning in Action, Learning for Action」ということなので、「日々の行動や思考の中で、さらなる行動のために学ぶ」ということです。かなり中立な言い方をしているので
すが、ここで学生達にしっかりと受け止めてほしいのは、関わる姿勢ということもと、私と一緒にプログラムをつくってきた教職員のチームは考えています。関わる姿勢というのは、先ほどの山本先生のお話だとコミットメントということだったり、やる気ということだと思います。臆病になっていたり、あとは、「しゃしゃる」という言葉をご存じでしょう。学生の皆さんは、きっとお使いになっていると思うのですが、しゃしゃり出ることを、しゃしゃると言って、学生達はリーダーシップやイニシアティブをとることを避けてしまう傾向があるような部分もあります。その中で関わることに臆病にならずに、関わっていこうというようなことを受け止めて、それを身に付けていってほしいと考えています。もうひとつは、はっきりと言葉で使っているのが、スタディーサービスツアーというふうにスリランカに行くプログラムでは、サービスという言葉を私たちも使っているのですが、このサービスは、サーブする。つまり「仕えること、尽くすこと」ということ。また、それは一方的ではなく、現場に出て仕えていただく、尽くしていただくというような経験を彼らがしていく中で、それは一体どういうことなのか、と考えてもらう。そのあたりをフックにして、私たちのプログラムでは、ボランティアというものを利用しています。

次に、コーディネーションについて。コーディネーションは、つまり場づくり、側面支援のことだと思うのですが、これは私たちのプログラムでは、現場に出ることはもちろん、体験を通じる刺激をすることなしに、どのように内在化するかの支援をします。最初海外ですので、その現場が海外に出たあと、自分たちの日常生活に戻ってくるという環境があります。現場では教室で学んだことの検証、教室では学べないことへの「気づき」というものが起こっていくわけです。それを起こさなくてはいけない。そうすると、知識の意味付けが始まることで、助け・助けられる。与え・与えられる。相互補完性というものがあるということに気付いていく。先ほど申し上げましたのが、ボランティアと呼んでもらうと、それは学部のカリキュラムの中で単位を出すことではないと言われますので、知識の検証というフレームを使っています。

現場に出るための準備、ここはすごく大切なところなのですが、コミュニケーション能力や根性、段取り力、これを総括して人間力と呼んでいるのですが、これを常に現場に出してから現場の方にお任せするのではなく、普段の授業の中で、どのように学び取っていたかというところを考えて、プログラムを運営しています。非常にガチンコ勝負で、大学で金八先生をやっているような気分にもなるのですが、そのようなかたちで促していっています。

次に仕組みづくりの方法について、少しお話を差し上げます。仕組みらしいものが、あまりないので、プログラムがどのような経緯でできたかについて、紹介させてください。まず、もとは国際インターンシップという名前で始まったプログラムなので、それは当時の学部長のイニシアチブでした。先ほどの広島大学の先生もおっしゃっていたのですが、トップ・ダウンのかたちでその仕組みがつくられるということで、それは科目だけだったのですか、その学部長が「やるぞ」と旗を振ってくださった。それで予算が確保
できた。予算を確保するときに、外部にある奨学金財団の理事長さんが、学部が出すことからもマッチングでお金を出すと。そのようなことも学部長が動いてくださったから、可能となった。

次に同じように学部長が、「これをやるから専任が必要だ。特任契約付きということで専任の教員を配置しよう」と。今は多くの大学が契約期限付きのリクルートメントに変わってきていると思うのですが、そうして先ほど申し上げた１授業（科目）を担当するという位置付けの教員ということで、私が来ました。

また、ほかの教員の関わり、ここが非常に難しいところなのですが、あくまでも一授業とされているので、一授業について、何人かの先生方が関わるということは、あまり大学では見られず、元からチームティーチングになっている授業なら別ですが、そういうフレームがなかったので、ゲリラ的にワーキンググループをつくりました。親委員会は２個あります。１つは特色ＧＰについての小委員会、その上に教務カリキュラム委員会、そして教授会というのですが、その重層構造の仕組みがあります。実際、モラルサポートをくださる先生はいらっしゃるのですが、やはり、大学の中で行政など、すごく先生方も忙しいので、現場に一緒に行かなければならず、ふだんのところから学生を見てくださるというような関わりは、ワーキンググループレベル、私のほかに２人の若手教員——１人は同じく特任、もう１人は専任ですが、その人達にゲリラ的に関わっていただいています。

次に、今日の参加者の名簿を拝見させていただいたのですが、職員の皆さんがすごく多いですね。「職員の姿勢」と偉そうに書かせていただいたのですが、私は学部事務室の職員の方に助けられています。特に若手の方です。意思決定はできない若手の方で、でも学生がどのように毎日を過ごしているかをよく分かっている人たちが、業務枠を超えた部分で手伝ってくれています。つまり、今私がお話ししていることから皆さんお分かりかと思うのですが、きちんとした仕組みというのはあまりなく、どうしてもおはや、個人の思い入れや個人がどこまでやれるかという部分に、非常に安定していないところに立っています。言ってみればダイナミックな仕組みかもしれないというものに支えられています。

あとは、先ほども少し触れたのですが、仕組みづくりに不可欠なのが、山本先生もおっしゃっていた学生のやる気、これは火を点ける工夫ということで、学生の皆さんは思いを持っていた思いと行動がうまく合わないときに、どうやって行動を起こしていってもらうか、もしくは興味のない学生さん達にもどうやって火を点けて生き生きしていってもらうか、そのあたりは後ほど紹介します私たちのプログラムのウェブ上に、全部シラバスなどの工夫が載っていますので、そちらでご覧いただければと思います。

そして、現場に出すための準備ということで、現場に出る前にビジネスレターやお礼状なりの感謝の言葉を伝えようとか、そのあたりの細かいところまでフィードバックと通して、ふだんから疑似体験のようなことをしてもらいます。そしてメールの書き方とかどういう言葉を使うか、朱入れと呼ばれているのですが、その朱入れをきちんとフィードバックするようにする。
最後に、先ほどの山本先生のお話にもあった現場からの理解とサポートということで、現場との関係を培うということ。すごく大事な部分なのでですが、これがまた制度化されるとなかなか関係を培うという部分が難しかったりして、個人できてんとふだんからやりとりしているほうですが、しっかりと関係ができて、やりとりうまくいくというような矛盾もあるんです。

次に、I I P A L P s の活動の内容ということですが、テーマとサイトということで、ここはざっと……。3つテーマがあります。開発、サステイナブル・リビング（持続可能な暮らし）、地域活動ということで、それぞれ場所がスリランカ、オーストラリア、米国です。スリランカでは、現地NGO、それから国際NGO、政府機関、国際機関、村の人々や町の人々に関わっていただく。オーストラリアのサステイナブル・リビングのコースでは、国立ハビダット賞受賞歴のあるエコビレッジに滞在して、またその周りにある地域生活協組合とかそういったところの方々にも協力いただきつつ、そこで活動をしていく。米国の地域活動をテーマにしたものは、ウィコンシン州マディソンというところで、N P O がたくさんあって、地域活動が盛んなところがサイトです。そこでのそれぞれN P O 、大学、コミュニティーの人々に関わっていただき、実際にそこでボランティア活動を行うと

そして、どのようにアカデミックにするか、どのように授業としてOKに見せるか、かつ授業としてOKなものにするかというところについて。一年間のプログラムになっています。行って終わりではなく、まず事前学習ということで、2科目4単位、もしくは3科目6単位、卒業単位には換算されませんが、授業として、それだけ事前学習をしていきます。これが理論と事例研究です。それから現場経験が、約2週間2単位、3週間のときもあるのですが、これが2単位として換算。振り返り学習とさらなるアクションということで、また1科目2単位。これが事後学習ですが、全部通して一年間となっています。

資料の中、授業名が一番左側です。A L P s 1 ・ 2 、それからフィールドスタディーズ、A L P s 3 となっていますので、例えば今年ですと前期（4月）にスタートすると、上記2つ（A L P s 1 ・ 2 とフィールドスタディーズ）の授業をとります。それで夏休みが始まってしまっても続いているのがこのA L P s 2 のほうで、夏休みの終わりぐらいにフィールドに2～3週間行く。後期が始まるとき、進化はまた2単位つけて、後期の終わりまでその授業が続くというかたちで一年のプログラムになっています。90分×15コマ、それが1科目の定義なのでですが、それをきちんとところとして、A L P s 2 の部分は、あくまでもその90分×15コマにプラスして出てきたもので、300分×5コマというのは、元々ないのでですが、それだけやっ

先ほど申し上げた海外から日常への環流ということなのでですが、どうしても海外の場合、海外に目が向いている学生さんたちは、最初のところ、日本で自分の身の回りのことというものが見えないのですが、実際に現場に行く、海外の現場に行くと鏡のような現象がおきまして、戻ってきたときに、自分たちがその場所で何ができるかという問いにぶち当たり
ます。またぶち当ててもらうようにそこは工夫するのですが、その中でさらなるアクションというものを生み出していくことが事後学習で求められます。これは、それぞれ私たちのところは仕組みがなくて、マッチングというようなかたちではなく、学び者がまず何をしたいか、そのときにどのような機会があるかというところで、毎回、毎回それを側面支援しながらつくっていきます。このスリランカのフェスティバルに関しては、去年1度やったのですが、とし2度目ということで、まだ若いプログラムですから、もちろ、例えば10年とかそこで任期があるのだとすれば、10年の中にもう少しマッチングというかストリームラインするような、整理するような工夫はしたいとは個人的には考えているのですが、なかなか今のところですと、どうしても1回やって、2回やって、3回やれるかぐらいのところで止まっている状態です。

去年、実はスリランカのプログラムの前に津波が起きて、その時はスリランカに行く前に新潟の地震が起きたところに行って、雪下ろしの作業をするというようなことをしてから現場に行くなど、少しでも海外を海外として切り取られたいものをとして捉えないようなかたちでプログラムはつくっています。

最後に学生が書いてくれたことなのですが、コーディネーションと自発性について、1つだけ。コーディネートし過ぎると、自発性を損なう部分があり、いかに自発的なものの中で学生が何を感じてくれて、その生々しいものをどういうふうにコーディネーションで脇から支えられるかということが突き付けられているのではないかと感じます。これは3年生で、プログラムに参加したときに、2年生だった人です。「自分から興味と取っ組み合い、死に勉強してどうしようもない壁にぶつかり葛藤する。そして、現場に赴き、村での労働やタミール人のコミュニティやエステートで体験したような頭だけでは理解できない心に直接突き刺さるような経験を積み、新たな学びのきっかけに出合う。これを繰り返すことで、興味や責任イコール自分の一部になる。自分的一部として感じることができるからこそ、真摯（しんし）に取り組み、責任をもってそのために動くことができる。開発やスリランカのことをより多くの方に知ってもらい、それらの将来に何か影響を与えられるために、私たちが起こしたアクションは、一人一人が問題を自分のこととして認識し、責任をもって取り組もうという姿勢があったから実現したのだ」と。なぜこの言葉を皆さんにシェアしたかったかというと、多くの学生は、ほとんどの時間を大学の授業の中で過ごしているのですが、大学の授業の中でボランティアなりサーブすることになりというもの、うまく具現化されていることが少なく、それらへの自発性を育む工夫がなされていないこともあまりないのではないかと思うからです。特にこれは私、総合政策学部で、総合政策学部が政策立案者の育成ということを標ぼうするから申し上げるのですが、政策立案者になるのだとすれば、このようなことは、授業の中でもっと学んでいっていいのではないかと考えます。ボランティアといっても、大学から切り離されたところで経験したすると、もちろん、能力のある学生は戻ってきた、日々の授業の中でつなげていくことができると思うのですが、もう少し大学のほうからそこを歩み寄って、間口を広げ、ふだんの授
業の中に日々の生活・学習との関連付けを「ボランティア」や「サープする」を軸としてサポートすることが必要なのではないかと。甘やかし過ぎだというふうに同僚に言われることもあるのですが、私はそのように考えています。

興梠 どうもありがとうございました。私も学生に教えている身として、日々の生活学習との関連付けをどうするのだという、ドキッとするような問題提起を突き付けられたような気がします。

３人の方々にお話をいただいたのですが、限られた時間ですが、もう少し話を進めていきたいと思っております。今回のシンポジウムのサブタイトルは、「持続可能なコーディネーションシステムを築くために」となっているわけですが、これは日本の大学の現状からするとかなり厳しいサブテーマではないかと思います。やはり、学生へのボランティア支援は、持続的・継続的に取組んでいくような仕組み作りというものを大学の中でしていかなければならないという課題がありまして、こういうサブタイトルになっているわけです。

では、この持続的なシステムをつくっていくために、大学にどのような条件、それからサポートをしていく環境というものをつけあげていくべきかということについて、３人の方々にご提言をいただきたいと思います。おそらく、それぞれの大学でのお立場がありますので、言える範囲（笑）ということにしないといけないのかなと思うのです。そこで、会場にいらっしゃいます皆さんに対して「こういったことを試みると、もっとうまくサポート環境というものが必要になっていくのでは」といったようなことをお話しいただきたいと思います。打ち合わせでは、それぞれ5分と言っていましたが、時間があまりなくて申し訳ありません。それぞれ3分以内ぐらいで和栗さん、山本さん、そして田中さんに「こういったことを試みることができて、うまくサポート環境がつくっていけるよ」といったようなことをお話しいただきたいと思います。打ち合わせでは、それぞれ5分と言っていましたが、時間があまりなくて申し訳ありません。それぞれ3分以内ぐらいで和栗さん、山本さん、そして田中さんに「こういったことを試みることができて、うまくサポート環境がつくっていけるよ」といったようなことをお話しいただきたいと思います。打ち合わせでは、それぞれ5分と言っていましたが、時間があまりなくて申し訳ありません。

和栗 はい。再び和栗です。プレゼンテーションの中でもある程度こういうことが必要だということを申し上げましたので、私のほうからは手短にお話し申し上げたいと思います。

今、こちらで「条件とサポート環境」というお題をいただいたのですが、条件としては、やはりトップ・ダウンである程度物事を進める必要があると感じます。上のほう、学部長なり学長なりが旗を振る。そしてそこに向かってみんなで走るような条件が出来上がることが必要だと思っています。下のほうからゲリラ的にやっていてもなかなか…それは大切で、そこも同時に育まなくてはいけない。でも、まずトップ・ダウンかつキーになる方々が何とかして、そのキーになる方々とそれをシェアできるような、「こんなこともできるじゃないか」とシェアできるような関係をつくるようなことが必要ではないかと思います。もうひとつの連携に関して、今日は国際ということで、少しスリランカとかオーストラリアとかお話ししたのですが、先ほど実は興梠先生ともお話しをして
いて、例えばボランティアセンターというと、きっと皆さん「地域との」ということをお考えになっているかと思うのですが、その地域とつながるために、キーになるようなその地域の団体、地域のボランティアセンターなり、区の〇〇センター、そういうところとの連携ですね。そのときに、たぶんそういったところは今似たようなリクエストをたくさん得ていると思いますので、どなたか大学の中でこれを担当する方が必要だと考えます。何人か中心になる方々で燃えるようなミッションをまず共有して、それをもって外部の担当者の方にお話に行かれることが必要かなと思います。あとはもう、これはどうしようもないというふうにお考えになるかもしれないのですが、教員や職員が、なぜ大学で教えているか、働いているかというところを問えるような場所、ふだんなかなかないと思います、忙しくて。でも、そういう対話なり小話なりというものがある、少しでもできるような環境を。

愚痴だけでなく、こういうふうになるといいね、こういうふうにやろうというような話をご自身と周りから始めることができれば、すごく難しいことです。大きい大学ですので、あまり制度のことは私のほうからは申し上げるとそこもまた……(笑)。まずは、個人として私がこんなことができるのではないかと考え、それを共有していく。そのあたりかなと思っております。あまりご参考にならないかもしれませんが……(笑)。

興梠 ありがとうございました。かなりの意を突いた意見だと思います。 (笑)それでは、山本さんはいかがでしょうか。

山本 基本的には今、和栗さんが言われたことに賛成です。やはり組織として取り組むぞという意志をどういうふうにして説得し、そのためのアクションをインスティチューション（Institution）としてやるようにするかがカギです。私はどうしてサービス・ラーニングをやっているかというと、やった学生たちが、なんとも元気になるからです。目が輝くし、次にいろいろ言われなくても卒論の課題は、そのやったことに関連したこと、あるいは将来の選択が非常にそれに関連したことになってくるという、その現実をやはりみんなに知ってもらうことが大切です。和栗さんとはいろいろなところでお会いしますが、中央大学の和栗さんのところの学生からもその影響の大きさを感じるのです。サービス活動をやった学生たちがいかに大きな影響を受け変えるかということを示しながら、皆のサポートを得るという、そのことが大切だということに尽きるのではないか。そういうことをすることにより、今まで関心のなかった先生やスタッフも関心をもってくるようになり、前向きの反応が出てきます。そのループをどのようにつくっていくかということで、やっている人たちは、チームを組んで、要するに何時間労働とは言わずに取り組まないといけないというところはありますけれども (笑)、それがうまくいくとどんな理解の輪が広がっていく。広島大学も私どものところも和栗さんのところもそれぞれなりのＧＰのようなものを賭いている。そうすると、それはある意味で、「まだやらなきゃならん」と言ったらなんですが (笑)、1 つのやる気が出てくるし、例えばこういう機会がどんどん出てくる。文部科学省も含めて、いろいろなこういうフォーラムができてきました。こういうような話になると、「うちもやんなきゃだめだ」という感じになってきます。その基は何かという
と、やはり学生はこんなに元気づく奉仕の体験をすることによって、学生のニーズに応えているのだということ。それを見ることに周りに示すという、これがサステイニングビリティーの基本ではないかと思います。それぞれの大学の環境は全然違いますから、それぞれに合うやり方をやる必要が、しかし基本は、良い例を示すということではないかと思います。

興梠 ありがとうございます。田中さんにお伺いするわけですが、おそらくどここの大学でもさまざまなケアを必要とする学生たちがいると思います。つまり、多様なハンディをもつ学生達を、どのようにケアをしていければいいのかというのは問題を抱えているのだろうというように思います。社会全体がノーマライゼーションへの取り組みをするとともに、さらには、「ソーシャルインクルージョン」に基づく誰も排除しない社会を築くということが大切になってきた。当然大学でもそういった社会に対応し、ハンディをもつ学生のための学習環境を整えていかなければならないわけです。しかし、現実のところからはと、なかなか環境づくりは難しい。それにはどういうノウハウで環境づくりに対応すればいいのか、予算をどうするのかというようなことがあると思いますが、そういう面では広島大学は、かなり先駆的な勇気ある取り組みをしているふうに思います。皆さんが抱えている問題ということも含めて、田中さんに少しだまたご助言をお願いしたいと思います。

田中 はい。今日の午前中の最初に文部科学省の方に「国立大学でのボランティア活動はまだまだである」というようなお話をしていただき、すごく「なにくそ」という気持ちになりました。あとは、山本先生のお話から、やはり「やらなきゃいかん」というような姿勢をもつこと、学生だけではなく教職員がやはりもつことが必要でございます。広島大学は全学体制になっていて、ボランティア活動室という名前にしています。ボランティアセンターではないのです。実質はボランティアセンターの機能をもっているのですが、センターという名前を付けていません。今日パワーポイントやお手元の別紙の資料でも組織図がありますが、私が言いたいことは、障害のある学生が所属している学部が責任を持つということで、ボランティアセンターにしましょうと、ついそこに頼りがちになってしまう支援を怠ってしまう可能性があります。支援を行うのは、その学生の周りにいる同級生であり、教職員であるということが一番なので、そこをまず「やらなきゃいかんと思わせる」ということです。また、周りがワアワア言っているだけではなく困ってしまうので、やはり障害学生自身（ニーズの発端）が、そのニーズをきちんと把握し、明確であることが重要ではないかと思います。これもやはり、教職員が大学のトップレベルのところに訴えていくのには必要な条件であると思います。

それから、広島大学やいくつかいろいろな大学で、やはり障害学生支援室であるとか、ボランティアセンターであるとか、いろんな学生を支援する部署があります。そういうところで働いている方は、やはり兼務ではなくて、専任でコーディネートをしていくこと、兼務ではやはり難しいことが多いです。かなり多岐にわたっています。広島大学でも、施設部であったり、教務の関連であったり、授業の担当の先生であったり、授業関係のカリキュラ
ムの部門であったり、いろんなところと連携をしなくてはいけない。それにはやはり一人の力だけではできませんので、連携をして協力するために、それをコーディネートする人が、やはり専任で必要です。それをやはり強く言いたいと思います。それから先ほど和栗先生のほうにもキーマンが、やはり必要ということがあります。これは、副学長や学部長であり、「旗振り役」と言っておられましたが、そういう人は、やはり必要だと思います。

それから予算措置、これが一番重要なのです。何もないところからボランティア活動というのはできる。ただ、それにもやはり限界があります。予算的な措置を付けないと、今日のサブテーマである「持続的なコーディネーションシステム」は継続していきません。ですので、やはり予算措置が重要で、広島大学の場合を少しお話させていただくと、部局長会議、副学長の下に、「障害学生就学支援委員会」があります。これは、先ほども言ったように、各学部の先生方が参加をしています。

ちょっと言い忘れなかったことがあって、実は教務担当の職員の方もこの委員会に入っています。ですから、先生方だけの組織ではなく、実は教職員の組織なのです。教職員の組織ですので、スムーズな動き、それから各学部から出ているというのが、やはりもうひとつのキーニになります。今現在、障害のある学生がいない学部の先生方も参加いただいていて、いずれ入学した場合にどう対応していこうというのを、やはり難しい、とまとってしまうということがあるので、現状はいなくななくても参加してもらうということで、意識を高めてもらう、それからそういう意識を持ってもらうことで、どこに入ろうものでもその学生が困らないようにするには、やはり全学組織や全学的な予算措置が必要であると訴えていかないと、やはり難しいといえます。広島大学はその方法で、全学予算で認めていただいております。

興梠 どうもありがとうございました。時間が来てしまいましたが、もう一言ずつお願いをしているのですが、おそらく今日来られている皆さんの中には、たまたまボランティアなどの支援に取り組んでいくたまたま担当になり、これからどのように1からつくりあげていくかという大学や関係者の方々もたくさんいらっしゃるのではないかと思います。これからシステムづくりに取り組んでいくという方に、ワンポイントアドバイスというのをお願いしているのですか（笑）、でもこんなに加減な質問に答えられるかどうか分からないのですが、既に具体的に踏み込んでいらっしゃるシンポジストの方々に一言ずつお伺いをして、あとはまた後ほどつかまえていろんな話をいただくということで締めたいと思います。すみません。

田中 ワンポイントですが、ツーポイントぐらいかもしれないですけど、平成15年度からは大学教職員向けにやはりレクチャーをしています。まずは大学職員の方に対しては、新人研修で必ずボランティア活動室に来ていただき、障害学生の対応についてお話をさせていただいています。それから年度末にチューター勉強会というのがあって、その学生の指
導教員や、そういう主となる先生方に集まっていたていて、やはりそこでも障害学生の対応であるとかというお話をさせていただいているのが全学的な意識の向上や意識改革につながっているのではないかと思います。以上です。

興梠 ありがとうございます。それでは山本さん、お願いします。

山本 繰り返しになるのですが、やっぱりボランティア活動というのは、何のためにやっているのかということが大切です。基本的には何か大事なことだからやっているわけです。障害者を助ける、あるいは途上国の貧しさのために何かできないかとか、海外だったらそういうことになるかもしれない。そういう社会的に意義のあることを学生達が実際に体験をして学ぶことが、いかに教育にとっては大事か、いかに大学にとっては大事かということを、実例をもって周りに示していくことが、周りのサポートを得る上でも非常に大切であると思います。特に教員でそういう意識のある人がいると、学生たちへの影響力が大きいですけれども、大学職員の方がそういう意識で学生に接したり、大学当局に働きかけて学生が変化する様を周りに示すようなことも、非常に抽象的な言い方ですが、プログラムの成長においても大事なことだと、私は思います。

興梠 ありがとうございます。それでは和栗さん、お願いいたします。

和栗 はい。もう個人的な励ましのような言葉にしかならないのですが、つい最近ですか、流行った歌の一節に『地に足をつけ、頭雲ぬけ、進む前に前に……』というラインがありまして。私もこのプログラムをゼロから周りの職員の方、それから教員の方に支えられてつくってくるときに、「前に進むとき、一歩出なかったら半歩ね」ということで、とにかく既成事実をつくりだそうともした。制度化にあたって最初なかなか辛くても、その歩みを止めずにぜひがんばってほしい。そしてその時に、学生の方がたくさんいらっしゃるので、学生の方でできることということはすごく大きいと思うのです。大学というのは、やはり学生のニーズに応えていかなくては、今後特に厳しいと思うので、そこで経験して、その要素を知っていて、その後の効果を知っている学生の皆さんが、声をあげていく、学生が積極的

興梠 どうもありがとうございました。この「学生ボランティア活動支援・促進のための連絡協議の集い」は、年を重ねる毎にいろいろなテーマで話し合いをしてきたわけですが、何度かご参加の方はお気付きかもしれませんが、この集いは学生自身が協議をしていくというような分科会が誕生して、より活発な議論が行われるようになってきました。

私は先週、愛媛に行きました。愛媛大学には「ボランティアセンター」が設置されていて、全国の大学の関係者に呼びかけてシンポジウムが行われました。そこには中立させていただいたのが、愛媛大学は、先ほど「国立大学はまだ……」とおっしゃったのですから、私は行ってみてちょっと驚いたのです。愛媛大学の「ボランティアセンター」を見て、これは国立大学なのかと思うくらい、明るくてオープンなすばらしいセンターでした。キャッチフレーズが「学生による学生のためのボランティアセンター」ということで、積極的
に学生達が参加し、プログラムづくりから運営までかかわっているということでした。そして、現場の教員の方と職員の方が、徹夜で「ボランティアセンター」の明るいインタリア・デザインを考え出した。そこにはパソコンが数台ならんでいる。しかも、ピアカウンセリングの部屋も隣接している。そこで、シンポジストとして、立命館大学のボランティアコーディネーターや学生が参加しておりました。この大学も学生が運営に参加しているボランティアセンターで、立命館大学のボランティアコーディネーターや学生が参加しておりました。このような話を作ったわけです。

会場には、シンポジウムに登場していないのですが、大勢の学生をはじめ、数は少ないのですけど地域の側から大学をサポートしているという中間支援機関であるボランティアセンターやNPOセンターなどの関係の方たちも来いらっしゃいます。

私は、このフォーラムについて、ひとつの夢があるのです。それはどういうものかと言いますと、いつかこのフォーラムのシンポジウムが、まず学生当事者がシンポジストになり、大学の経営者もシンポジストになり、現場の先生もシンポジストになり、地域の側で支援していくような関係機関の人もシンポジストになって、この場で多様な議論ができるような時代が来ると本当にいいなと思っております。そういった時代は、もうすぐそこまで来ているような感じもします。

その夢を語りながら、本日のシンポジウムを締めさせていただきます。3人のシンポジストの皆さんに、あらためて深く感謝を申し上げます。また、皆さまにおかれましては、これからの討議の際に活かしていただき、さらに交流を深めていただければ幸いに思います。どうも皆さん、ありがとうございました。(拍手)
第2部 分科会

第1分科会

「学生部職員のためのボランティア入門」

＜コーディネーター＞
興梠 寛氏（社会福祉法人世田谷ボランティア協会理事長）
ボランティア活動を構造的に捉えるならば、「自己実現」と「社会実現」との2つの性質によって成立しているのではないかと思う。

大学において、学生のためのボランティア支援に取り組むためには、教職員はその2つの側面について理解を深めていく必要がある。つまり、1つは、学生がボランティア活動をとおして自己の成長をはかるために支援する側面である。また、2つは、学生がボランティア活動をとおして社会に参画するために支援する側面である。

また、あえてボランティア活動のもつ潜在的教育力とは、①自己を見つめつつ価値意識を育て、自己の可能性を感じて、自らのよりよい生き方を探りつついく力「自己実現力」、②他者に関心を持ち、よく知り、よりよい関係をつくりながら、他者と共に生きる環境を創りだすことのできる力「社会力」、③学ぶことの意義を知り、目標をもって持続的にそれを探求し、学習成果を自分のものにしていくことのできる力「学習力」、④社会を構成する人間としての自覚と責任意識を育み、家族や近隣社会をはじめ、自治コミュニティや国家、さらには地球市民として、共生の時代を切り拓いていくことのできる力「市民力」と、表現することができるだろう。

分科会では、学生がボランティア活動をとおして自己や社会と出会い、さらには、学生が学びの世界をより深め広げるために、大学に何が出来るかを探ることにした。

分科会は、入門編として、コーディネーターによる講義とワークショップ形式で、参加者の積極的な意見交換をもとに、大学におけるボランティア支援システムの在り方について活発な議論を行うことができた。

（報告者：興梠 寛）
第2分科会

「ボランティアセンターのつくりかた」

＜コーディネーター＞
小抜 隆氏（東北福祉大学ボランティアセンター コーディネーター）

＜事例発表者＞
郡司 京子氏（国際医療福祉大学）
岩永 秀徳氏（国際基督教大学 総務理事）
第2分科会「ボランティアセンターのつくりかた」

コーディネーターまとめ

小抜 隆（東北福祉大学ボランティアセンター）

第2分科会では「事例発表」、「グループ討議」、「グループ討議の発表」の流れで会を進めました。

事例発表では、IUHW ボランティアセンターの郡司京子さん、長崎県社会福祉協議会の岩永秀徳さんより日頃の取組や課題、地域との連携についてお話をいただきました。

グループ討議では、6グループに分かれ「魅力的なボランティアセンターをつくる」をテーマとし、自由に意見・アイデアを出していただき、話し合いの成果を模造紙にまとめました。

グループ討議の発表では、それぞれの班ごとにセンターの「目的・めざすもの」、「具体的な取組」、「組織・運営」、「特徴」、「魅力的なボランティアセンターづくりのポイント・キーワード」について発表していただき、それらをもとに意見・情報を交換しました。

グループごとに学生がメンバーとして入っていたこともあり、普段はなかなか聞くことができない「生の声」を聞くよい機会になったようでした。

班ごとに出された、魅力的なボランティアセンターづくりのポイント・キーワードの一部をご紹介いたします。

魅力的なボランティアセンターづくりのポイント・キーワード(一部)

- 自己実現
- 役に立てる
- 学内外のニーズに応える
- 集いの場
- 素敵なスタッフがいる
- やって良かったと思う
- ともにという目線
- 元気・活力
- 社会資源の活用
- 社会福祉協議会など
- 一人で抱えこまない
- 共生
- 多文化共生
- 社会福祉協議会など
- 笑顔
- 発見
- トッピックに話し合う
- 開放的
第3分科会

「実践的ボランティアコーディネーション術」

＜コーディネーター＞
村田 素子氏（聖心女子大学学生部マグダレナ・ソフィアセンター）

＜事例発表者＞
高橋 邦夫氏（木更津工業高等専門学校）
諏訪田克彦氏（神戸親和女子大学）
桐澤 夏樹氏（立命館大学ボランティアセンター学生スタッフ）
第三分科会には大学スタッフ、教員（大学、工業高等専門学校）、学生、地域のボランティアセンタースタッフ、合わせて30名が当日参加しました。その多くが日々、試行錯誤しながら学生ボランティア活動の支援をされている方々でしたので、情報だけでなく悩みも疑問も共有しつつでのつながることを感じてもらうことに3時間半を費やしました。

事例発表には工業高等専門学校、大学、学生の立場から話をしてもらいました。その後のグループワークでは教員、職員、学生を交えたグループを5つ作り、各自が抱える課題をグループ内で共有してもらいました。最後にボランティアコーディネートを行ううえでキーとなるポイントをグループごとに発表してもらい、更に全体でそのキーに伴う課題、問題点を共有しました。

以下がグループワーク、全体シェアリングからでてきたものです。

ボランティアコーディネートをする上でのキーグループ1：ネットワーク、地域との関わり方グループ2：つながり、ニーズの把握、活動をする上での仕組みづくり、「ボランティア」という概念の再確認グループ3：ボランティアする側・される側、情報提供する側・される側の温度差、事前研修、情報源の信用度、リクルートの仕方、有償・無償・費用弁償等金銭に関わる問題グループ4：(活動に)一歩踏み出すための後押し、専門知識、社協とのつながりグループ5：安全性の確保、ヨコのつながり、地域とのつながり

ポイントはネットワーク、つながり

フラットな関係であるボランティア活動で大事なのはネットワーク、ヨコのつながりです。ボランティアする側・される側、情報提供する側・される側、これらもヨコにつながった関係にあります。このつながりは大学内だけでとどまっているものではありません。社協やNPO・NGO、その他様々な団体とつながっていく必要があります。

他部署とは違った組織形態をもつ大学ボランティアセンター

学内の組織体系（ピラミッド型）に組みしながらも外とネットワークをもつ大学ボランティアセンターは、既存の部署とは異なった性格（ネットワーク型）をもっています。その性格をボランティアコーディネーターをはじめ、その他大学関係者は理解しておく必要があります。両タイプの長所を生かしたとき、センターはより効率的に機能するでしょう。
第4分科会
「大学の授業におけるボランティア支援の可能性」

＜コーディネーター＞
栗田 充治氏（亜細亜大学国際関係学部教授）

＜事例発表者＞
藤田 久美氏（山口県立大学）
今道 貞一氏（成蹊大学）
第4分科会「大学の授業におけるボランティア支援の可能性」

大学における学生ボランティアの状況に変化がある。文科省の補助金政策により、地域貢献と連携した大学開放の取り組みやボランティア体験活動の導入がこれまでになく積極的に展開されている。ボランティア関連授業の開設も300校に近づいている。大学内のボランティアセンター機能を持つ組織もすでに50校を超えた。大学内にボランティアセンター機能を持つ組織を作ることは大学の教育・研究活動と切り離せない。その意味でサービスラーニング的な取り組みが今後ますます試みられると予想される。地域の側も、次世代の若者に地域の課題を理解してもらい、共に取り組むことで地域を活性化できる絶好の機会と捉えている。現在は、こうした動きにきちんと対応できる大学と、対応できない大学の二極に分かれていないのではないか。ボランティア活動の持つ教育力を大学関係者が積極的に理解する必要がある。

以上の問題意識で、第4分科会の運営を行った。

先ず、参加者の中から、藤田久美氏（山口県立大学社会福祉学部）と今道貞一氏（成蹊大学学生部）の二人に事例発表をお願いした。

藤田氏は社会福祉系の学生がボランティア関連サークルに属している学生以外は、普段あまりボランティアに関わっていないことを知り、教育プログラムへのボランティア教育の導入を始めた。1年生向けの教養科目「ボランティア」(2003開設)、2年生向けの「プログラム企画演習」、3年生向けの専門科目「福祉ボランティア論」という順を追って、体験が深まるよう指導している試みが報告された。また、この中で、学生の提案から学生主体のボランティアセンターの組織「学生プチボランティアセンター」の設立とその活動の一端が紹介された。

今道氏は2002年に行った学生実態調査から、ボランティアをしたことのある学生が14%程度なのに、機会があればやりたいという学生が80%に達していることに注目し、学生部職員として学生がボランティアへのきっかけをつかめる対策を講じてきた。情報提供やボランティア入門講座の開催、ボランティア体験報告会の開催を通じて、大学内にボランティアセンターを作ろうという動きを作り出しつつある状況が報告された。同氏も大学のある地域のボランティアセンター運営委員になるなか、2004年度から文学部にボランティア関連科目が開設され、2005年、学生部長のもとに「ボランティア推進委員会」が組織された。
その後、6グループに分かれて、「知りたいこと、疑問・課題点」を挙げて、その対策をグループの知恵を絞って考える作業に移った。約50分の作業後、模造紙にまとめてもらった内容を代表者が発表した。

多方面の課題が出されたが、共通した点の一つは、「ボランティアを進めるに当たっての大学の壁」の存在である。お金がない、もの（施設・機材・部屋・電話）がない、しくみがない（学生の自主的活動への制約）、関心と理解がない（窓口の対応、教員の対応）、人（キーパーソンとなる教職員・学生）がないという5つの壁である。

キーパーソンは待っていても現れない。先ず個々に参加した我々がイニシアティブを取らなければ何も変わらない。ボランティア新企画を助成金付きで募集した国士舘大学のような、何らかの仕掛けを導入する案もある。ちょっとした自主的活動の成果をマスコミに流し、学外で評価してもらうことで学内の関心と理解を刺激する手もある。ボランティアセンターを持つ大学と地域的な連携を取ることで学生・教職員にモデルを示す手もある。地域貢献を重視するようになった現在、地域のボランティアセンターやボランティア・市民活動団体などに大学へ協働を働きかけてもらう迂回作戦もある。

2つ目は、学生のボランティアは、地域に役立つことをめざすのか、それとも学生の学びを優先しているのか、という疑問である。受け入れ先に迷惑をかけて、大学に苦情が来る場合もいたという。事前学習を徹底する課題だが、それでも万全ではない。サービスラーニングのレベルなら、それなりの知識と技能を持って出かけることが前提となる。しかし、コーディネータの見解は、学生の場合は学び優先でいいと思う。若い世代を育てるという教育の意義を受け入れ先にも共有してもらいたいと思う。逆に言えば、そうした教育優先を欠く活動先は避けて方が賢明である。そうしたところは、学生を「タダの労働力」としてしか期待していないところが多いからだ。

3つ目は、ボランティア授業そのものへの疑問にどう答えるか、という課題である。ボランティアの単位化についての根強い懸念が大学関係者の中にいる。専門として確立されているのか、評価の基準はあるのか、という疑問もある。コーディネータの見解は、ボランティアについて学ぶならば、あるいは、ボランティア体験活動を用いて学ぶならば、その学びの成果に対して単位を与えることは可能だと思う。したがって、評価の対象はボランティア活動そのものではなく、それを媒介にして進められる学びの内実である。また、明確に言えば、授業で課されるボランティア体験活動は、本来の自主的なボランティア活動ではなく、教育という制度的枠組みの中で課される「コミュニティ・サービス」である。その違いをはっきりすこと必要がある。したがって、ボランティア体験活動を必修にする場合は、学生の自主性に対する最大限の配慮が求められる。また、評価の軸は、教師の評価や相互評価、受け入れ作の評価などを参照させた上での自己評価である必要がある。

最後に、分科会には学生諸君が数名参加してくれ、学生の視点で大学当局の課題を指摘してくれた。その内のある学生が、学長に改善提案書を出したという話を、参加者から激励の暖かい拍手が送られ一幕もあり、和やかな名刺交換、感想交換の内に終了した。
第5分科会

「学生が結ぶボランティアネットワーキング」

＜コーディネーター＞
今井　治氏（S v n e t 事務局コーディネーター）
第5分科会では、参加者が学生主体の分科会ということもあり、ボランティア活動を行っていく上での悩みや工夫、ぶつかっている壁や将来の展望について、学生の目線で語り合い、また、大学間のネットワークづくりの“きっかけ”となるような意見交換・協働を視点にいたるワークショップも行いました。それらを通じて、「学生ボランティアの活動実態」や「活動を生かして何ができるか」について活発な意見が交わされました。

＜当日出された主な意見・見解など＞

学生ボランティア活動の支援について
ボランティア情報の充足については、インターネットや広報紙・メールマガジン等を通じて、学内外において、必要とする情報は、ある程度得られている状況であると言える。しかし、逆に情報がありすぎることにより、その中から自分が必要としている情報を選び取ることが難しく、活動の一歩踏み出せない状況もある。
ボランティア活動を行うための支援について、情報整備や参加の一歩となる仕掛け（講座・セミナー）の充実、活動中や前後のサポート・フォロー体制が望まれるが、中でも特に、ボランティアサークルやグループで活動している学生は、メンバー確保や安定した運営体制を確立していくために、大学の施設等の資源をもっと積極的に提供・利用できることを期待している。

学生がボランティア活動を行う意義について
学生はいわゆる『社会貢献』を目的としてボランティア活動を行うのではなく、『新しい発見や学び・様々な出会いや体験』を目的として活動をしている、または参加の動機として始める学生が多くいると思われる。
ボランティア活動をすることにより、個人それぞれボランティア活動を通じて自分の変わった点について違いはあるものの、理論と知識のみで捉えるのでなく実践から多くのものを学び、社会問題に対する意識を高めている。

最後に、今回、各地から多くの熱心な学生が参加しており、「ボランティアとは何か」「ボランティア活動をする意義は何か」など、ボランティアに対する見方・考え方にも多様性が見られました。これら活動に参加したからこそ理解できる変化といえるかもしれません。是非これからも学内外問わずボランティアリーダーとしての活躍を期待したいです。
平成17年度学生ボランティア活動支援・促進のための連絡協議の集い
アンケート集計結果 総括表

〇 平成17年12月8日（木）開催（東京国際交流館 プラザ平成）
〇 参加者人数 201名
〇 回答者数 172名
〇 回収率 85.6%

※結果数値（%）表章単位未満を四捨五入してあるため、内訳の合計が計に一致しないことがある

<table>
<thead>
<tr>
<th>質問事項</th>
<th>回答</th>
<th>件数</th>
<th>割合</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>* 性別</td>
<td>1. 男</td>
<td>92</td>
<td>53.5%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>2. 女</td>
<td>69</td>
<td>40.1%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>不明</td>
<td>11</td>
<td>6.4%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>計</td>
<td>172</td>
<td>100.0%</td>
</tr>
<tr>
<td>A 年齢別</td>
<td>1. 10・20歳代</td>
<td>67</td>
<td>39.0%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>2. 30歳代</td>
<td>34</td>
<td>19.8%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>3. 40歳代</td>
<td>17</td>
<td>9.9%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>4. 50歳代</td>
<td>10</td>
<td>5.8%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>5. 60歳代</td>
<td>0</td>
<td>0.0%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>6. 70歳代以上</td>
<td>6</td>
<td>3.5%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>未記入</td>
<td>13</td>
<td>7.6%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>計</td>
<td>172</td>
<td>100.0%</td>
</tr>
<tr>
<td>B 地域別</td>
<td>1. 北海道</td>
<td>3</td>
<td>1.7%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>2. 東北</td>
<td>11</td>
<td>6.4%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>3. 関東甲信越（東京都以外）</td>
<td>45</td>
<td>26.2%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>4. 東京都</td>
<td>39</td>
<td>22.7%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>5. 東海・北陸</td>
<td>13</td>
<td>7.6%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>6. 近畿</td>
<td>17</td>
<td>9.9%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>7. 中国</td>
<td>6</td>
<td>3.5%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>8. 四国</td>
<td>5</td>
<td>2.9%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>9. 九州</td>
<td>20</td>
<td>11.6%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>未記入</td>
<td>13</td>
<td>7.6%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>計</td>
<td>172</td>
<td>100.0%</td>
</tr>
<tr>
<td>C 大学関係者のみ集計</td>
<td>1. 大学</td>
<td>120</td>
<td>81.6%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>2. 短期大学</td>
<td>9</td>
<td>6.1%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>3. 高等専門学校</td>
<td>7</td>
<td>4.8%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>未記入</td>
<td>11</td>
<td>7.5%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>計</td>
<td>147</td>
<td>100.0%</td>
</tr>
<tr>
<td>D 設置者別</td>
<td>1. 国立</td>
<td>28</td>
<td>19.0%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>2. 公立</td>
<td>13</td>
<td>8.8%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>3. 私立</td>
<td>101</td>
<td>68.7%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>未記入</td>
<td>5</td>
<td>3.4%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>計</td>
<td>147</td>
<td>100.0%</td>
</tr>
<tr>
<td>E 身分別</td>
<td>1. 教員</td>
<td>28</td>
<td>19.0%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>2. 事務職員</td>
<td>84</td>
<td>57.1%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>3. 嘱託</td>
<td>7</td>
<td>4.8%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>4. その他</td>
<td>24</td>
<td>16.3%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>未記入</td>
<td>4</td>
<td>2.7%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>計</td>
<td>147</td>
<td>100.0%</td>
</tr>
<tr>
<td>F 担当者としての経験年数（複数回答）</td>
<td>1. 1年未満</td>
<td>57</td>
<td>37.3%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>2. 1年～2年未満</td>
<td>34</td>
<td>22.2%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>3. 2年～3年未満</td>
<td>23</td>
<td>15.0%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>4. 3年～4年未満</td>
<td>11</td>
<td>7.2%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>5. 4年～5年未満</td>
<td>9</td>
<td>5.9%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>6. 5年～6年未満</td>
<td>5</td>
<td>3.3%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>7. 6年～7年未満</td>
<td>3</td>
<td>2.0%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>8. 7年～8年未満</td>
<td>2</td>
<td>1.3%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>9. 8年～9年未満</td>
<td>1</td>
<td>0.7%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>10. 9年～10年未満</td>
<td>2</td>
<td>1.3%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>11. 10年～15年未満</td>
<td>4</td>
<td>2.6%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>12. 15年未満</td>
<td>1</td>
<td>0.7%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>13. 20年未満</td>
<td>1</td>
<td>0.7%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>計</td>
<td>153</td>
<td>100.0%</td>
</tr>
<tr>
<td>質問事項</td>
<td>回答</td>
<td>件数</td>
<td>割合</td>
</tr>
<tr>
<td>---------</td>
<td>------</td>
<td>------</td>
<td>------</td>
</tr>
<tr>
<td>G 関係団体のみ集計</td>
<td>①公益法人</td>
<td>4</td>
<td>44.4%</td>
</tr>
<tr>
<td>②NPO・NGO法人</td>
<td>1</td>
<td>11.1%</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>③地域・市民団体</td>
<td>1</td>
<td>11.1%</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>④その他</td>
<td>3</td>
<td>33.3%</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>計</td>
<td>9</td>
<td>100.0%</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>H 身分別</td>
<td>①常勤</td>
<td>3</td>
<td>33.3%</td>
</tr>
<tr>
<td>②嘱託</td>
<td>1</td>
<td>11.1%</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>③ボランティア</td>
<td>3</td>
<td>33.3%</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>未記入</td>
<td>2</td>
<td>22.2%</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>計</td>
<td>9</td>
<td>100.0%</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>I 担当者としての経験年数</td>
<td>①0.5年</td>
<td>1</td>
<td>11.1%</td>
</tr>
<tr>
<td>②4年</td>
<td>1</td>
<td>11.1%</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>③5年</td>
<td>1</td>
<td>11.1%</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>④7年</td>
<td>2</td>
<td>22.2%</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>⑤10年</td>
<td>1</td>
<td>11.1%</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>未記入</td>
<td>3</td>
<td>33.3%</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>計</td>
<td>9</td>
<td>100.0%</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>J その他のみ集計(※)</td>
<td>未記入</td>
<td>16</td>
<td>100.0%</td>
</tr>
</tbody>
</table>

アンケート集計結果

Q1 「学生ボランティア活動支援・促進のための連絡協議の集い」に参加して

<table>
<thead>
<tr>
<th>反映内容</th>
<th>回答</th>
<th>件数</th>
<th>割合</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>①十分満足できた</td>
<td>51</td>
<td>35.5%</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>②概ね満足できた</td>
<td>103</td>
<td>54.7%</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>③あまり満足できなかった</td>
<td>16</td>
<td>5.2%</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>④まったく満足できなかった</td>
<td>0</td>
<td>0.0%</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>未記入</td>
<td>2</td>
<td>4.7%</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>計</td>
<td>172</td>
<td>100.0%</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

SQ1 内容について

<table>
<thead>
<tr>
<th>反映時間</th>
<th>回答</th>
<th>件数</th>
<th>割合</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>①ちょうどよい</td>
<td>135</td>
<td>78.5%</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>②長すぎる</td>
<td>11</td>
<td>6.4%</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>③短すぎる</td>
<td>21</td>
<td>12.2%</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>未記入</td>
<td>5</td>
<td>2.9%</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>計</td>
<td>172</td>
<td>100.0%</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

SQ2 時間について

<table>
<thead>
<tr>
<th>反映内容</th>
<th>回答</th>
<th>件数</th>
<th>割合</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>①十分満足できた</td>
<td>71</td>
<td>41.3%</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>②概ね満足できた</td>
<td>76</td>
<td>44.2%</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>③あまり満足できなかった</td>
<td>11</td>
<td>6.4%</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>④まったく満足できなかった</td>
<td>1</td>
<td>0.6%</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>未記入</td>
<td>13</td>
<td>7.6%</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>計</td>
<td>172</td>
<td>100.0%</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

Q3 第2部分科会について

<table>
<thead>
<tr>
<th>反映内容</th>
<th>回答</th>
<th>件数</th>
<th>割合</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>①ちょうどよい</td>
<td>125</td>
<td>72.7%</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>②長すぎる</td>
<td>15</td>
<td>8.7%</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>③短すぎる</td>
<td>20</td>
<td>11.6%</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>未記入</td>
<td>12</td>
<td>7.0%</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>計</td>
<td>172</td>
<td>100.0%</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

SQ1 内容について

<table>
<thead>
<tr>
<th>反映内容</th>
<th>回答</th>
<th>件数</th>
<th>割合</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>①十分満足できた</td>
<td>13</td>
<td>7.6%</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>②概ね満足できた</td>
<td>78</td>
<td>45.3%</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>③あまり満足できなかった</td>
<td>63</td>
<td>36.6%</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>④まったく満足できなかった</td>
<td>8</td>
<td>4.7%</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>未記入</td>
<td>10</td>
<td>5.8%</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>計</td>
<td>172</td>
<td>100.0%</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

Q4 情報交換会(ランチセッション)について

<table>
<thead>
<tr>
<th>反映内容</th>
<th>回答</th>
<th>件数</th>
<th>割合</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>①適当である</td>
<td>138</td>
<td>80.2%</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>②不適当である</td>
<td>28</td>
<td>16.3%</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>未記入</td>
<td>6</td>
<td>3.5%</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>計</td>
<td>172</td>
<td>100.0%</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

Q5 開催時期について

<table>
<thead>
<tr>
<th>反映内容</th>
<th>回答</th>
<th>件数</th>
<th>割合</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>①適当である</td>
<td>157</td>
<td>91.3%</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>②不適当である</td>
<td>10</td>
<td>5.8%</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>未記入</td>
<td>5</td>
<td>2.9%</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>計</td>
<td>172</td>
<td>100.0%</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

Q6 会場について
<table>
<thead>
<tr>
<th>質問事項</th>
<th>回答</th>
<th>件数</th>
<th>割合</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>Q7 日程はどの程度が適当か</td>
<td>①半日</td>
<td>27</td>
<td>15.7%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>②1日</td>
<td>113</td>
<td>65.7%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>③1泊2日</td>
<td>26</td>
<td>15.1%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>④その他</td>
<td>1</td>
<td>0.6%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>未記入</td>
<td>5</td>
<td>2.9%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>計</td>
<td>172</td>
<td>100.0%</td>
</tr>
<tr>
<td>SQ1 継続開催について</td>
<td>①毎年続けてほしい</td>
<td>153</td>
<td>89.0%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>②続けてほしいが、毎年実施しなくてもよい</td>
<td>14</td>
<td>8.1%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>③実施する必要はない</td>
<td>0</td>
<td>0.0%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>④その他</td>
<td>0</td>
<td>0.0%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>未記入</td>
<td>5</td>
<td>2.9%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>計</td>
<td>172</td>
<td>100.0%</td>
</tr>
<tr>
<td>SQ2 今後の参加について</td>
<td>①ぜひ参加したい</td>
<td>94</td>
<td>54.7%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>②できれば参加したい</td>
<td>70</td>
<td>40.7%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>③参加したくない</td>
<td>0</td>
<td>0.0%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>④その他</td>
<td>2</td>
<td>1.2%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>未記入</td>
<td>6</td>
<td>3.5%</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>計</td>
<td>172</td>
<td>100.0%</td>
</tr>
</tbody>
</table>

※: その他ののみ集計は、所属未記入である。
アンケート集計結果 詳細

平成17年度 学生ボランティア活動支援・促進のための連絡協議の集いのアンケートについて、回答があったものの詳細をまとめたものである。回答の詳しい割合、個別意見などは、以下のとおりである。

○ 平成17年12月8日（木）開催（東京国際交流館プラザ平成）
○ 参加者数 201名
○ 回答者数 172名
○ 回収率 85.6%

※結果数値（%）表章単位未満を四捨五入しているため、内訳の合計が計に一致しないことがある。

1. 回答者の内訳

* 性別

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>回答数</th>
<th>割合</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>男</td>
<td>92</td>
<td>53.5%</td>
</tr>
<tr>
<td>女</td>
<td>69</td>
<td>40.1%</td>
</tr>
<tr>
<td>不明</td>
<td>11</td>
<td>6.4%</td>
</tr>
<tr>
<td>全体</td>
<td>172</td>
<td>100.0%</td>
</tr>
</tbody>
</table>

A 年齢別

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>回答数</th>
<th>割合</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>10・20歳代</td>
<td>67</td>
<td>39.0%</td>
</tr>
<tr>
<td>30歳代</td>
<td>38</td>
<td>22.1%</td>
</tr>
<tr>
<td>40歳代</td>
<td>34</td>
<td>19.8%</td>
</tr>
<tr>
<td>50歳代</td>
<td>17</td>
<td>9.9%</td>
</tr>
<tr>
<td>60歳代</td>
<td>10</td>
<td>5.8%</td>
</tr>
<tr>
<td>70歳代以上</td>
<td>0</td>
<td>0.0%</td>
</tr>
<tr>
<td>未記入</td>
<td>6</td>
<td>3.5%</td>
</tr>
<tr>
<td>全体</td>
<td>172</td>
<td>100%</td>
</tr>
</tbody>
</table>
### B 地域別

<table>
<thead>
<tr>
<th>地域</th>
<th>回答数</th>
<th>割合</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>北海道</td>
<td>3</td>
<td>1.7%</td>
</tr>
<tr>
<td>東北</td>
<td>11</td>
<td>6.4%</td>
</tr>
<tr>
<td>関東甲信越（東京都以外）</td>
<td>45</td>
<td>26.2%</td>
</tr>
<tr>
<td>東京都</td>
<td>39</td>
<td>22.7%</td>
</tr>
<tr>
<td>東海・北陸</td>
<td>13</td>
<td>7.6%</td>
</tr>
<tr>
<td>近畿</td>
<td>17</td>
<td>9.9%</td>
</tr>
<tr>
<td>中国</td>
<td>6</td>
<td>3.5%</td>
</tr>
<tr>
<td>四国</td>
<td>5</td>
<td>2.9%</td>
</tr>
<tr>
<td>九州</td>
<td>20</td>
<td>11.6%</td>
</tr>
<tr>
<td>未記入</td>
<td>13</td>
<td>7.6%</td>
</tr>
<tr>
<td><strong>全体</strong></td>
<td><strong>172</strong></td>
<td><strong>100.0%</strong></td>
</tr>
</tbody>
</table>

### C 大学関係者のみ集計

<table>
<thead>
<tr>
<th>所属</th>
<th>回答数</th>
<th>割合</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>大学</td>
<td>120</td>
<td>81.6%</td>
</tr>
<tr>
<td>短期大学</td>
<td>9</td>
<td>6.1%</td>
</tr>
<tr>
<td>高等専門学校</td>
<td>7</td>
<td>4.8%</td>
</tr>
<tr>
<td>未記入</td>
<td>11</td>
<td>7.5%</td>
</tr>
<tr>
<td><strong>全体</strong></td>
<td><strong>147</strong></td>
<td><strong>100.0%</strong></td>
</tr>
</tbody>
</table>

### D 設置者別

<table>
<thead>
<tr>
<th>所属</th>
<th>回答数</th>
<th>割合</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>国立</td>
<td>28</td>
<td>19.0%</td>
</tr>
<tr>
<td>公立</td>
<td>13</td>
<td>8.8%</td>
</tr>
<tr>
<td>私立</td>
<td>101</td>
<td>68.7%</td>
</tr>
<tr>
<td>未記入</td>
<td>5</td>
<td>3.4%</td>
</tr>
<tr>
<td><strong>全体</strong></td>
<td><strong>147</strong></td>
<td><strong>100.0%</strong></td>
</tr>
</tbody>
</table>

### E 身分別

<table>
<thead>
<tr>
<th>身分</th>
<th>回答数</th>
<th>割合</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>教員</td>
<td>28</td>
<td>19.0%</td>
</tr>
<tr>
<td>事務職員</td>
<td>84</td>
<td>57.1%</td>
</tr>
<tr>
<td>嘱託</td>
<td>7</td>
<td>4.8%</td>
</tr>
<tr>
<td>その他</td>
<td>24</td>
<td>16.3%</td>
</tr>
<tr>
<td>未記入</td>
<td>4</td>
<td>2.7%</td>
</tr>
<tr>
<td><strong>全体</strong></td>
<td><strong>147</strong></td>
<td><strong>100.0%</strong></td>
</tr>
</tbody>
</table>
## F 担当者としての経験年数（複数回答）

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>動態学部の情報提供・相談窓口やボランティアセンター等の担当教職員</th>
<th>ポランティアに関る授業や養成講座等の担当教職員</th>
<th>学生ボランティアの情報提供・相談窓口やボランティアセンター等の担当教職員</th>
<th>学生ボランティアに関する課外活動団体の顧問教職員</th>
<th>その他</th>
<th>総計</th>
<th>割合</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1年未満</td>
<td>18</td>
<td>6</td>
<td>14</td>
<td>10</td>
<td>9</td>
<td>57</td>
<td>37.3%</td>
</tr>
<tr>
<td>1年〜2年未満</td>
<td>14</td>
<td>6</td>
<td>6</td>
<td>5</td>
<td>3</td>
<td>34</td>
<td>22.2%</td>
</tr>
<tr>
<td>2年〜3年未満</td>
<td>6</td>
<td>4</td>
<td>7</td>
<td>4</td>
<td>2</td>
<td>23</td>
<td>15.0%</td>
</tr>
<tr>
<td>3年〜4年未満</td>
<td>3</td>
<td>7</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td>11</td>
<td>7.2%</td>
</tr>
<tr>
<td>4年〜5年未満</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>3</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>9</td>
<td>5.9%</td>
</tr>
<tr>
<td>5年〜6年未満</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td>5</td>
<td>3.3%</td>
</tr>
<tr>
<td>6年〜7年未満</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td></td>
<td>3</td>
<td>2.0%</td>
</tr>
<tr>
<td>7年〜8年未満</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td></td>
<td>2</td>
<td>1.3%</td>
</tr>
<tr>
<td>8年〜9年未満</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td>1</td>
<td>0.7%</td>
</tr>
<tr>
<td>9年〜10年未満</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>4</td>
<td></td>
<td>4</td>
<td>2.6%</td>
</tr>
<tr>
<td>10年〜15年未満</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td>2</td>
<td>1.3%</td>
</tr>
<tr>
<td>15年</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td>1</td>
<td>0.7%</td>
</tr>
<tr>
<td>20年</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td>1</td>
<td>0.7%</td>
</tr>
<tr>
<td>総計</td>
<td>46</td>
<td>18</td>
<td>42</td>
<td>28</td>
<td>19</td>
<td>153</td>
<td>100.0%</td>
</tr>
</tbody>
</table>

## G 関係団体のみ集計

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>回答数</th>
<th>割合</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>公益法人</td>
<td>4</td>
<td>44.4%</td>
</tr>
<tr>
<td>NPO・NGO法人</td>
<td>1</td>
<td>11.1%</td>
</tr>
<tr>
<td>地域・市民団体</td>
<td>1</td>
<td>11.1%</td>
</tr>
<tr>
<td>その他</td>
<td>3</td>
<td>33.3%</td>
</tr>
<tr>
<td>全体</td>
<td>9</td>
<td>100.0%</td>
</tr>
</tbody>
</table>

## H 身分別

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>回答数</th>
<th>割合</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>常勤</td>
<td>3</td>
<td>33.3%</td>
</tr>
<tr>
<td>嘱託</td>
<td>1</td>
<td>11.1%</td>
</tr>
<tr>
<td>ポランティア</td>
<td>3</td>
<td>33.3%</td>
</tr>
<tr>
<td>未記入</td>
<td>2</td>
<td>22.2%</td>
</tr>
<tr>
<td>全体</td>
<td>9</td>
<td>100.0%</td>
</tr>
</tbody>
</table>
I 担当者としての経験年数

<table>
<thead>
<tr>
<th>回答数</th>
<th>割合</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>0.5年</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>4年</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>5年</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>7年</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td>10年</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>未記入</td>
<td>3</td>
</tr>
<tr>
<td>全体</td>
<td>9</td>
</tr>
</tbody>
</table>

J その他のみ集計（※）

<table>
<thead>
<tr>
<th>回答数</th>
<th>割合</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>未記入</td>
<td>16</td>
</tr>
</tbody>
</table>

※: その他のみ集計は、所属未記入である。

2. アンケート集計結果

Q1 「学生ボランティア活動支援・促進のための連絡協議の集い」に参加して

<table>
<thead>
<tr>
<th>回答数</th>
<th>割合</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>十分満足できた</td>
<td>61</td>
</tr>
<tr>
<td>概ね満足できた</td>
<td>94</td>
</tr>
<tr>
<td>あまり満足できなかった</td>
<td>9</td>
</tr>
<tr>
<td>全く満足できなかった</td>
<td>0</td>
</tr>
<tr>
<td>未記入</td>
<td>8</td>
</tr>
<tr>
<td>全体</td>
<td>172</td>
</tr>
</tbody>
</table>

【満足できない理由】
- 講演、シンポジウムがあまり魅力あるものではなかった
- 分科会後にランチセッションをした方が交流できたのでは
- （ノート）テイクが用意してもらえなかったから
- ボランティア活動は学生だけの行動ではない。学生には教育が必要
- 学生ボランティアセンター等の話が多く、ネットワーク関係の話が全面的に出ていなかった
- パネリストなど、わかっているのに言わない一言がある。真の意味で経験を積んだ発言が聞きたい
- 認識の温度差に聞きがありすぎた
Q2 第1部 シンポジウムについて

SQ1 シンポジウムはどうでしたか

<table>
<thead>
<tr>
<th>回答数</th>
<th>割合</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>十分満足できた</td>
<td>51</td>
</tr>
<tr>
<td>概ね満足できた</td>
<td>103</td>
</tr>
<tr>
<td>あまり満足できなかった</td>
<td>16</td>
</tr>
<tr>
<td>全く満足できなかった</td>
<td>0</td>
</tr>
<tr>
<td>未記入</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td><strong>全体</strong></td>
<td><strong>172</strong></td>
</tr>
</tbody>
</table>

SQ2 時間的にはどうでしたか

<table>
<thead>
<tr>
<th>回答数</th>
<th>割合</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>ちょうどよい</td>
<td>135</td>
</tr>
<tr>
<td>長すぎる</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>短すぎる</td>
<td>21</td>
</tr>
<tr>
<td>未記入</td>
<td>5</td>
</tr>
<tr>
<td><strong>全体</strong></td>
<td><strong>172</strong></td>
</tr>
</tbody>
</table>

【自由記入】

・時間の割には内容が多すぎる等時間が短かった（時間に余裕がない）（12）
・ボランティアの知識がないため等高次元な話なので理解できなかった（2）
・資料が配付されていなかったのが残念（パワーポイントの資料もすべてほしい）（2）
・ねらいが多様化し焦点が絞り切れていない（2）
・ボランティアセンターの事務系の方にシンポジストになってほしい
・フロアからの質問も受けてほしい
・シンポジストの視点の相違を同じフォーマットで表した方がより分かりやすい
・障害学生支援とボランティアを混同しているので
・もう少し学生ボランティア活動支援に関連させてほしい
・海外におけるボランティアという視点だけでなく、もっと地域に密着した事例を入れてほしい
・災害ボランティアの内容も取り上げてほしい
・マイクの音声が聞き取りにくかった
・本校も見習いたい点がたくさんありました
・大変参考になり満足しております
Q３ 第２部 分科会について

SQ1 参加された分科会はどうでしたか

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>第1分科会</th>
<th>第2分科会</th>
<th>第3分科会</th>
<th>第4分科会</th>
<th>第5分科会</th>
<th>分科会未記入</th>
<th>総計</th>
<th>割合</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>十分満足できた</td>
<td>21</td>
<td>14</td>
<td>10</td>
<td>7</td>
<td>6</td>
<td>13</td>
<td>71</td>
<td>41.3%</td>
</tr>
<tr>
<td>概ね満足できた</td>
<td>22</td>
<td>17</td>
<td>11</td>
<td>6</td>
<td>8</td>
<td>12</td>
<td>76</td>
<td>44.2%</td>
</tr>
<tr>
<td>あまり満足できなかった</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>0</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>2</td>
<td>11</td>
<td>6.4%</td>
</tr>
<tr>
<td>全く満足できなかった</td>
<td>0</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>0.6%</td>
</tr>
<tr>
<td>未記入</td>
<td>3</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
<td>1</td>
<td>6</td>
<td>13</td>
<td>7.6%</td>
</tr>
<tr>
<td><strong>総計</strong></td>
<td>48</td>
<td>36</td>
<td>22</td>
<td>15</td>
<td>18</td>
<td>33</td>
<td>172</td>
<td>100.0%</td>
</tr>
</tbody>
</table>

SQ2 時間的にはどうでしたか

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>第1分科会</th>
<th>第2分科会</th>
<th>第3分科会</th>
<th>第4分科会</th>
<th>第5分科会</th>
<th>分科会未記入</th>
<th>総計</th>
<th>割合</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>ちょうどよい</td>
<td>36</td>
<td>23</td>
<td>19</td>
<td>11</td>
<td>14</td>
<td>22</td>
<td>125</td>
<td>72.7%</td>
</tr>
<tr>
<td>長すぎる</td>
<td>5</td>
<td>3</td>
<td>0</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>4</td>
<td>15</td>
<td>8.7%</td>
</tr>
<tr>
<td>短すぎる</td>
<td>4</td>
<td>8</td>
<td>3</td>
<td>1</td>
<td>3</td>
<td>1</td>
<td>20</td>
<td>11.6%</td>
</tr>
<tr>
<td>未記入</td>
<td>3</td>
<td>2</td>
<td>0</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
<td>6</td>
<td>12</td>
<td>7.0%</td>
</tr>
<tr>
<td><strong>総計</strong></td>
<td>48</td>
<td>36</td>
<td>22</td>
<td>15</td>
<td>18</td>
<td>33</td>
<td>172</td>
<td>100.0%</td>
</tr>
</tbody>
</table>

【進行・内容等で気づいた点】

〇第1分科会
・他の方々と話す等時間がほしかった（4）
・ボランティアに関する知識が深まった（2）
・デスカッションのためには少人数がよい
・参加者の興味を引き付ける発表等がありよかった
・知識が豊富で進行もよかった

〇第2分科会
・情報交換等デスカッションをしたい（2）
・声が小さい時もあるのでマイクを使用してほしい（2）
・ボランティアに対して根本的に否定の考えがある
・個別討論等もう少しプログラムを練ってほしい
・時間が足りない
・発表用紙の作成等に時間を使いすぎ
・班の人数が多すぎる
・ボランティア（センター）の作り方を、事例をとおして教えてほしかった

〇第3分科会
・同じグループの人等話が気軽にできていたよかった（3）
・コーディネーション術のテーマに合ってなかった
○第4分科会
・グループワークで話し合うことで、問題が共有できてよかった
・問題解決にまで至らなかったので若干消化不良気味
・分科会のテーマに沿って進行するべき
・もう少し問題を絞って掘り下げるべき（単なる意見交換で終わった）
・大学によって取組みの温度差があり、グループ討論しにくかった
・もう少し時間がほしい

○第5分科会
・司会者の話が長い（班別で話がしたい）
・学生ボランティアの話が多く、ネットワーク関係の話が前面に出ていなかった
・話すテーマを絞った方がわかりやすい
・ちょっと時間が長い

【今後、分科会で取り上げた方が良いテーマ・内容等】
・学生が地域社会にできることは
・環境問題について
・みんなの悩み解決
・時宜を得たテーマが必要
・学生、大学と地域との関わり連携、協働のあり方（2）
・ボランティアセンターとはどのようなものか
・大学内にボランティアセンターは必要か、その問題点
・障害学生と高等教育支援
・学生課職員の日々の業務内容及び取組み方の話
・職員として具体的に何ができるか

Q 4 情報交換会（ランチセッション）について

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>回答数</th>
<th>割合</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>十分満足できた</td>
<td>13</td>
<td>7.6%</td>
</tr>
<tr>
<td>概ね満足できた</td>
<td>78</td>
<td>45.3%</td>
</tr>
<tr>
<td>あまり満足できなかった</td>
<td>63</td>
<td>36.6%</td>
</tr>
<tr>
<td>全く満足できなかった</td>
<td>8</td>
<td>4.7%</td>
</tr>
<tr>
<td>未記入</td>
<td>10</td>
<td>5.8%</td>
</tr>
<tr>
<td>全体</td>
<td>172</td>
<td>100.0%</td>
</tr>
</tbody>
</table>

【進行・内容等で気づいた点】
・分科会の後の方が（ディナーセッション等）交流しやすい（7）
・料理が少ない、ほとんど食べられなかった（7）
・（アイスブレーキング・自己紹介等）話をする時間後の方がよかった（5）
・あいまいで、会場も広く殺風景。何をどう交流してよいかわかりづらい（4）
・食事がしづらい、テーブルを増やしてほしい（3）
・名札が見えづらい等、話にくかった（3）
・分科会ごとに分ける必要なし、自由に行きたい（2）
・名刺交換等の時間がほしい
・情報交換できなかった
・フリーにし過ぎた
・機会を活かしきれず心残り
・資料の部数が参加者数に比べて少なかった
・シンポジウム等と分科会の間に情報交換会を設定したことはよかった
・昨年と違い、分科会ごとにテーブルを分けたのはよかった

Q5 開催時期について

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>回答数</th>
<th>割合</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>適当</td>
<td>138</td>
<td>80.2%</td>
</tr>
<tr>
<td>適当でない</td>
<td>28</td>
<td>16.3%</td>
</tr>
<tr>
<td>未記入</td>
<td>6</td>
<td>3.5%</td>
</tr>
<tr>
<td>全体</td>
<td>172</td>
<td>100.0%</td>
</tr>
</tbody>
</table>

【適当でないとの回答者の希望開催時期】

<table>
<thead>
<tr>
<th>時期</th>
<th>回答数</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>3月</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td>4〜8月</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td>5月または10月</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>5〜6月</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>6〜7月</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>6月</td>
<td>3</td>
</tr>
<tr>
<td>8月</td>
<td>3</td>
</tr>
<tr>
<td>8〜9月</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>9月</td>
<td>3</td>
</tr>
<tr>
<td>10月</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td>10〜11月</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td>11月</td>
<td>3</td>
</tr>
<tr>
<td>平日不可</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>土日</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>年末不可</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td>全体</td>
<td>28</td>
</tr>
</tbody>
</table>

Q6 会場について

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>回答数</th>
<th>割合</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>適当</td>
<td>157</td>
<td>91.3%</td>
</tr>
<tr>
<td>適当でない</td>
<td>10</td>
<td>5.8%</td>
</tr>
<tr>
<td>未記入</td>
<td>5</td>
<td>2.9%</td>
</tr>
<tr>
<td>全体</td>
<td>172</td>
<td>100.0%</td>
</tr>
</tbody>
</table>

【適当でないと思われる理由】

・少し遠い（7）
・都心がよい（2）
・駅、空港の近くがよい
・広くてきれいだが、女子トイレが混雑した
Q7 日程はどの程度が適当か

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>回答数</th>
<th>割合</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>半日</td>
<td>27</td>
<td>15.7%</td>
</tr>
<tr>
<td>1日</td>
<td>113</td>
<td>65.7%</td>
</tr>
<tr>
<td>1泊2日</td>
<td>26</td>
<td>15.1%</td>
</tr>
<tr>
<td>その他</td>
<td>1</td>
<td>0.6%</td>
</tr>
<tr>
<td>未記入</td>
<td>5</td>
<td>2.9%</td>
</tr>
<tr>
<td><strong>全体</strong></td>
<td>172</td>
<td>100.0%</td>
</tr>
</tbody>
</table>

【その他の回答内容】
・1日でもよいが1泊2日でもよい

Q8 日本学生支援機構が「学生ボランティアの集い」を継続的に開催することについて

SQ1 「集い」継続開催について

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>回答数</th>
<th>割合</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>毎年続けてほしい</td>
<td>153</td>
<td>89.0%</td>
</tr>
<tr>
<td>続けてほしいが、毎年実施しなくてもよい</td>
<td>14</td>
<td>8.1%</td>
</tr>
<tr>
<td>実施する必要はない</td>
<td>0</td>
<td>0.0%</td>
</tr>
<tr>
<td>その他</td>
<td>0</td>
<td>0.0%</td>
</tr>
<tr>
<td>未記入</td>
<td>5</td>
<td>2.9%</td>
</tr>
<tr>
<td><strong>全体</strong></td>
<td>172</td>
<td>100.0%</td>
</tr>
</tbody>
</table>

SQ2 今後の「集い」参加について

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>回答数</th>
<th>割合</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>ぜひ参加したい</td>
<td>94</td>
<td>54.7%</td>
</tr>
<tr>
<td>できれば参加したい</td>
<td>70</td>
<td>40.7%</td>
</tr>
<tr>
<td>参加したくない</td>
<td>0</td>
<td>0.0%</td>
</tr>
<tr>
<td>その他</td>
<td>2</td>
<td>1.2%</td>
</tr>
<tr>
<td>未記入</td>
<td>6</td>
<td>3.5%</td>
</tr>
<tr>
<td><strong>全体</strong></td>
<td>172</td>
<td>100.0%</td>
</tr>
</tbody>
</table>

【その他意見・要望・感想等】
・現在の状況と今回の内容がかけ離れていたので、もっと知識を深めてから参加すればよかったですと反省している
・他の大学・団体の方が意見を交換することができ、とてもよい体験ができました
・本当によい経験になりました。このような機会をより多くの人に与えるべきだと思います
・多くの情報を楽しみながら得ることができた。楽しかった
・今後もこの集いは続けてください。運営されている皆様、お疲れ様でした
・有意義な経験ができ、非常によかった
ボランティア活動の継続方法について、正解を決めることは難しいのでしょうか。
宿が確保できる時期に実施で助かりました。
とてもいろんな人の意見が聞けてよかった。みんな自分の意見を発表し、また、しっかり自分の意見をみんな持っていたことは、すごいと思った。早く学校に帰ってボランティアセンターのみんなに話したい。
午後からスタート、又は昼終了が時間調整しやすい（日帰りは少しタイト）
内容については、各校の進み方が違うと思うので、センター等スタートしているところと、これからの所で分けてもよいかと思う
たくさんの情報をいただき勉強になりました
もう少し分科会のテーマを探ってみて意見交換ができる運営形態をとってほしかった
交流を広げ、今後のネットワーク作りには役立つ
ワークキャンプをできる場をもっとも設けてほしかった
今日は色々な角度からお話が聞けてよかった
障害当事者も参加するから、そのバリアフリーの考慮を希望する
大学、学生、地域、障害者、それぞれ交えて実施した方がよいのではないか
定員をもっと増やしてほしい（参加できなかった方もたくさんいました）
もっと学生が参加できるといい
学生が参加することを前提にしたアンケートを作成してほしい
分科会の内容はとてもよかった
各大学の現状、課題、システムなどの話を聞く機会がほしい
全体的にボランティアをまだ分かっていない方が多い
全国から学生が集まり、話すことができたので、いろいろな情報を得られた
定期的にこのような会に参加するべきである。毎年参加したい
学生、職員限定することなく参加できるこの集いはよい
参加者がフレンドリーでなごやかな雰囲気が好ましいと感じた
食事の量が充分でなかったと思う
一番の問題として、組織的な障害がある。そこを解決しないことには壁を打ち破れないと思う
もう少し具体的な立ち上げ方法を聞いてみたくかった
他大学との交流は、本当に意見を交換するのによいと思う
年に1回ではなく、回数を増やす等、各大学の取組みについて紹介してはどうか
ボランティアセンターの現状等、その時のテーマについてアンケートを実施してはどうか
学生ボランティアの活動内容、方向性、課題について関係者が一堂に集まり話し合う場は必要と考える
広くこの集いの存在をアピールして、たくさんの人が集まればいいと思う
日本版キャンパス・コンパクトができることを期待する
具体的な情報が得られてよかった
可能なら、東西2分科会（ブロック別）にした集いがあってもよい
いろいろな関係者の方の話が聞いてよかった
障害学生に対するサポートの話をしているのに、その学生に対する保障がないのはお買い。情報保障が必要と思う
来年4月からボランティア活動の授業を担当するので大変参考になった
大変充実した内容であった
とても勉強になり、いろいろ刺激を受けました
分科会で立場も地域も全く異なる人と話ことができたのでよかった
全社協を共催に入れて、より深いネットワークの構築を願う
交流含みであれば近隣県での班分けにしてほしい
リラックスした暖かい雰囲気で楽しく学び合うことができた
グループで、テーマを基にして一つのポスターを作製していく作業はとてもよかった
シンポジウム、講演の時に居眠りをしている人がいた
ボランティアコーディネーターについて、もっと詳しく知りたかった
（他大学との）情報交換会の場が、より多くであればよかったのでは
熱く語り合えてよかった
学校関係者が多かったので、民間機関にも参加してほしい
1日実施でよいですが、2会場があればよかった
具体例の発表（失敗談も含め）がもう少しあればよかった
ボランティアセンターのある大学と、必要か迷っている大学と、分けた内容の討議テーマを設定した方がよい
（この集いは）研修会なのか。であるとしたら何を学ぶことが目的なのか
大学のコスト管理（資源の有限性）の観点は必要ないのか
ボランティアさせるためのインセンティブ作りという発想は正しいのか
対象は一部の熱心な学生？大多数の冷ややかな学生？
もう少し充分に話し合いたかった
いろいろな学生と出会えてよかったが、もっと実際ボランティアセンターを組織している学生に会えたなら、よりよかった
ランチセッションより分科会を長くした方がよかった
知り合った後のランチセッションであれば有意義だと思う。今回の昼は間がもたない
終了時刻を早め、ランチセッションを短縮してもよい（分科会途中で帰る人が多かった）
学生がグループにして、学生の声が聞けたのがとても実践的でよかった
学生が主体なのに、平日だと参加しにくい
ボランティアがテーマなのにサポート体制が何もないのはおかしい（手話通訳、ノートテイク等必要）
同じ問題を抱える方々と話し合う機会を作っていたらありがたい
【アンケートのお願い】

本日は、お忙しいところご参加いただき、誠にありがとうございました。
今後の企画立案の参考といたしたく、恐れ入りますが、アンケートにご協力をいただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

（注）該当する選択肢を1つだけ選んでお答えください。

＜ご記入者＞
＊性別　男・女

A 1 10・20 歳代 2 30 歳代 3 40 歳代 4 50 歳代 5 60 歳代 6 70 歳以上
B 1 北海道 2 東北 3 関東甲信越（東京都以外） 4 東京都 5 東海・北陸
6 近畿 7 中国 8 四国 9 九州

（CからFまでは大学関係者のみ、当てはまるもの1つをお答えください。）
C 1 大学（大学・短期大学併設で両方の校名で出席の場合を含む） 2 短期大学 3 高等専門学校
D 1 国立 2 公立 3 私立
E 1 教員 2 事務職員 3 嘱託 4 その他（  ）
F 担当者としての経験年数
① ボランティアの情報提供・相談窓口やボランティアセンター等の担当教職員（担当歴：約  年）
② ボランティアに関する授業や養成講座等の担当教職員（担当歴：約  年）
③ 学生課・厚生課等ボランティア担当部署の担当教職員（担当歴：約  年）
④ 学生のボランティアに関する课外活動団体の顧問教職員（担当歴：約  年）
⑤ その他（担当歴：約  年）

（GからIまでは、団体関係者のみ、当てはまるもの1つをお答えください。）
G 1 自治体（公社含む） 2 公益法人（財団・社団・社会福祉法人など）
3 ＮＰＯ・ＮＧＯ法人 4 地域・市民団体（法人化されていないもの）
5 その他（  ）
H 1 常勤 2 非常勤（パート・アルバイト含む） 3 嘱託 4 ボランティア
5 その他（  ）
I 担当者としての経験年数（担当歴：約  年）

Q1. 最初に、「学生ボランティア活動支援・促進のための連絡協議の集い」に参加して（全体的に）
1 十分満足できた 2 概ね満足できた 3 あまり満足できなかった 4 全く満足できなかった
3、4の場合は理由をご記入ください。
（  ）

Q2. 第1部 シンポジウムについて
SQ1. シンポジウムはどうでしたでしょうか。
1 十分満足できた 2 概ね満足できた 3 あまり満足できなかった 4 全く満足できなかった
※ 進行・内容等でお気づきの点がありましたらご記入ください。
（  ）
SQ2 時間的にはどうでしたでしょうか。
1 ちょうどよい 2 長すぎる 3 短すぎる

Q3. 第2部 分科会について（参加された分科会 ⇒ 第____分科会）
SQ1. 参加された分科会はどうでしたでしょうか。
1 十分満足できた 2 概ね満足できた 3 あまり満足できなかった 4 全く満足できなかった
※ 進行・内容等お気づきの点がありましたらご記入ください。
( )
※ 今後、分科会で取り上げたほうが良いテーマ・内容等がありましたらご記入ください。
( )
SQ2. 時間的にはどうでしたでしょうか。
1 ちょうどよい 2 長すぎる 3 短すぎる

※ 次に、今回の企画そのものについてお尋ねします。

Q4. 情報交換会（ランチセッション）はどうでしたでしょうか。
1 十分満足できた 2 概ね満足できた 3 あまり満足できなかった 4 全く満足できなかった
※ 進行・内容等お気づきの点がありましたらご記入ください。
( )

Q5. 開催時期はどうでしょうか。
1 適当 2 適当ではない（2の場合、適当と思われる時期 ⇒ 月頃）

Q6. 会場はどうでしたでしょうか。
1 適当 2 適当ではない
2 の場合、適当でないと思われる理由をご記入ください
( )

Q7. 日程はどのくらいが適当でしょうか。
1 半日 2 1日 3 1泊2日 4 その他（ ）

Q8. 日本学生支援機構が、今後も「学生ボランティア活動支援・促進のための連絡協議の集い」を継続的に開催することについて
SQ1. あなたは日本学生支援機構に、今後もこのような「集い」を続けてほしい、と思いますか。
1 毎年続けてほしい 2 続けてほしいが、毎年実施しなくてもよい
3 実施する必要はない 4 その他（ ）
SQ2. あなたは、今後もこのような「集い」に参加したいと思いますか。
1 ぜひ参加したい 2 できれば（機会があれば）参加したい
3 参加したくない 4 その他（ ）

※ その他ご意見、ご要望、ご感想等ございましたらご記入ください。
参加者内訳

◆平成17年度「学生ボランティア活動支援・促進のための連絡協議の集い」出席者内訳

<table>
<thead>
<tr>
<th>内訳</th>
<th>男</th>
<th>女</th>
<th>計</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>大学・短期大学等</td>
<td>86</td>
<td>59</td>
<td>145</td>
</tr>
<tr>
<td>ボランティア関係機関・団体</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>9</td>
</tr>
<tr>
<td>学生</td>
<td>21</td>
<td>26</td>
<td>47</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td><strong>小計</strong></td>
<td><strong>111</strong></td>
<td><strong>90</strong></td>
</tr>
<tr>
<td>講演者</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>シンポジスト・コーディネーター</td>
<td>6</td>
<td>2</td>
<td>8</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td><strong>小計</strong></td>
<td><strong>7</strong></td>
<td><strong>2</strong></td>
</tr>
<tr>
<td>総計</td>
<td><strong>118</strong></td>
<td><strong>92</strong></td>
<td><strong>210</strong></td>
</tr>
</tbody>
</table>

◆大学・短期大学等内訳

<table>
<thead>
<tr>
<th>国立</th>
<th>男</th>
<th>女</th>
<th>計</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>大学</td>
<td>16</td>
<td>4</td>
<td>20</td>
</tr>
<tr>
<td>高等専門学校</td>
<td>7</td>
<td>0</td>
<td>7</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td><strong>小計</strong></td>
<td><strong>23</strong></td>
<td><strong>4</strong></td>
</tr>
<tr>
<td>公立</td>
<td>大学</td>
<td>7</td>
<td>3</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td><strong>小計</strong></td>
<td><strong>7</strong></td>
<td><strong>3</strong></td>
</tr>
<tr>
<td>私立</td>
<td>大学</td>
<td>53</td>
<td>43</td>
</tr>
<tr>
<td>短期大学</td>
<td>3</td>
<td>9</td>
<td>12</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td><strong>小計</strong></td>
<td><strong>56</strong></td>
<td><strong>52</strong></td>
</tr>
<tr>
<td>総計</td>
<td><strong>86</strong></td>
<td><strong>59</strong></td>
<td><strong>145</strong></td>
</tr>
</tbody>
</table>

◆分科会別内訳

<table>
<thead>
<tr>
<th>分科会</th>
<th>男</th>
<th>女</th>
<th>計 (学生数)</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>第1分科会</td>
<td>33</td>
<td>27</td>
<td>60 (0)</td>
</tr>
<tr>
<td>第2分科会</td>
<td>28</td>
<td>20</td>
<td>48 (7)</td>
</tr>
<tr>
<td>第3分科会</td>
<td>17</td>
<td>16</td>
<td>33 (9)</td>
</tr>
<tr>
<td>第4分科会</td>
<td>19</td>
<td>11</td>
<td>30 (2)</td>
</tr>
<tr>
<td>第5分科会</td>
<td>16</td>
<td>14</td>
<td>30 (29)</td>
</tr>
<tr>
<td>総計</td>
<td><strong>113</strong></td>
<td><strong>88</strong></td>
<td><strong>201 (47)</strong></td>
</tr>
<tr>
<td>大学・短期大学・高等専門学校</td>
<td>129校・192名</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>-----------------------------</td>
<td>----------------</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>愛知大学</td>
<td>山梨学院大学</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>群馬大学</td>
<td>中央大学</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>金沢大学</td>
<td>九州大学</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>九州大学</td>
<td>九州産業大学</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>桐蔭学園大学</td>
<td>神戸学園大学</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>長崎県立医療福祉大学</td>
<td>東京大学</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>鷹沼大学</td>
<td>東京大崎大学</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>熊本大学</td>
<td>福岡大学</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>越後県立市民健康科学大学</td>
<td>京都大学</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>ボランティア関係団体等</th>
<th>8団体・9名</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>川崎市高津社会福祉協議会</td>
<td>ボランティアセンター武蔵野</td>
</tr>
<tr>
<td>長崎県社会福祉協議会</td>
<td>社会福祉法人世田谷ボランティア協会</td>
</tr>
<tr>
<td>NPO法人山梨県ボランティア協会</td>
<td>東京ボランティア・市民活動センター</td>
</tr>
<tr>
<td>大分県社会福祉協議会</td>
<td>ボランティアをする学生を支援するネットワーク (SVnet)</td>
</tr>
</tbody>
</table>